新續古今和歌集　上

特別
ヘ4
8099
21(1)

へ4
8099
21
(1)

<2001-044>

早稲田文庫

新續古今和歌集序

天成地定人靈之文斯昭古往今來衆製之体屡改若夫長歌短哥之異曲五字七字之円旋以之有余混本之不足雖以似分於歩驟皆莫不發諸性情徙而移成文於五音寄眺於四序綴句數之有合賞物理之自然是以出雲表之於前難波継之於後蓋君德則有富緒河之什和王然則有淺香山之篇或謳小藤於飯籠之中或頌蘭橋於氏姓之船蓋三十一字之作所以專盛而永傳也

平城天子詔侍臣撰萬葉集以來代々集更二十祀逾六百雲箋霞翰則卷盈汗牛之書綺句繪章則光奪抵鵲之玉璧譬於孫陽執策而群空冀北野遂提什而枕盡山中雖然言泉流於筆端而不竭思風發於胸次何則詠高騰馥遺芳知雲被後世青藍寒冰豈不潤色前條古曰人丸既没和哥不在於茲乎信哉斯言今國家膺中興之運同上古之風時有所尚苟群莫不趨者無貴無賤要先韞面之識一唱一和思往廣載之美征夷大將軍源義教朝左文右武之資懋南征小代之績不啻服服肱于元首又安於黎民又繞回筆海之倒瀾舉藝苑之墜緒茲養于 朝言之撰集者文思之標幟而今不作者已久矣寧非明時之缺典乎由是遂擢禁內便宜之殿為和哥編撰之所始書命四位於臺

暦置丈人之命於和處之元久於鳥羽離宮文永於亀山仙洞者
符契昜合皆唯斗的耶仍詔權中納言藤原朝臣雅世專
尚（業イ）其變（具イ）論思獻納況夜在至入古今取捨芻蕘縱雖非
青天之窺管豈得無滄海之遺珠乎歷六年甫就一集春
夏秋冬之霽風雲草木之興可以怨可以群可以
刺藻雕靡者蕭散者蔽塞者衍餘者摧而廣之不可群
卷上掩三代之餘風下貽千載之偉觀故名曰新續古今
和歌集者也永享戊午八月下澣謹序

あめつちはじめてまりて人のしわざいまだしめくだかり
いにしへの情いさきよりてくにのおもひきしさ中に
やまとことの八雲のもののことはみそてかりむすひ
そのかみこれより世のかしこき民をもてみちのすゑの
あまてらすおほむかみむすひむすひのかみさかへと
きこしめしつゝ人まさに道はきこしめしとをかたくなる
まことにひろき道おのづからおこなはれ
ならびなき萬葉の名をたてみなもと古今集とぞなつけゝる
徳のかぎりこれをもていにしへまでかきやまとことのは
てらしひとめぐらしてかぞへてひさしくなりにけり
これをのべつよきことはなをさめてこれをかすみちを

松浦の家につたはれることは此葉は父の卿のもとにもよほし遣
しらは南色と金の紙に金泥にて調の林をそへます
くしたくし花よりもくれ給舞にあまりをゆるさるゝに
乃かくれみちよりたびありけるちかき小弥のさゝらかしく舞
をり世をうけたまはりおよそおほえりてあまりたあまたさ
松浦のかみは野なる草木にかけわたりをしけく雲
のうへあおぐほどまうりことは宮の月日のひかりを乱ず
ゆくもあるは此三月とゆきまた乃みをはるかにをむかしぬ
昔は御風の波にて海のかすみてなびきしかにけりすと
いふ事なし志らのこすれたのおもはいまよりことさら源
朝臣えひきをたゝいふらいてさせき見たにぬさまかく

あかさきやまきのはなたえたまひけさきたりことは浅茅
たりのうらふめそしかくさ浅茅の雲れおふにさりなき学
てすゑたるおもひかは寺河田のうへの白波寄志つ御手録
乃宮の人さすことを浅茅とれ春の程はいてひけたまて宮
のまれいつもはさ波さけるしかかのかはな宮古れうとふ光
我家なるしらはされひろき河をそしめむと読ひき
の春秋はえれまた乗れるあまりはれとの風ならぬはさらん
ことを浅茅にふかきよりて近き世は芸閣の風かりく
天暦に梨壺のうけ給ひてむらしとたてかのとかはらえぬ
まろ雅のあとにかさゞりて文永に飛鳥井のよしひをきて本
たるしを松浦めして権中納言藤原朝臣雅世に授

其後和歌の浦の浪のうへには大内山の松のしけきをしめし
ときんの世をかさねすかたにあらはれかたきは代々あらそひて
えらひとゝのへしむる事を一人に勅する事はそのみなきさ
後撰集あつめしに梨壺のそのかみたれを撰を定め
いはれをきせていつくそれ家々をさへむつ事なりといはゆる
後拾遺金葉詞花千載これ也其後前中納言定家卿
あつめて其世の跡をつきて新勅撰を撰し奉り
前大納言為家又二代につゝきて続後撰を撰ひ奉り
まうけ二条にありそのまうけ世にいひつたへ
藤川のひとつなかれにあひうけて家の風を吹すを
栄雅飛鳥井も歌まりはうけつきて拾くふかとめ

さゝ集しそれより飛鳥井雅経卿は新古今五人のえらひに
くはゝり二条家の門にまさりてすでに七代はすき
その道をさとる事を又一とせなりきこえならひ給
みことのりをうけするもいまことに時のうたのためかはらぬ事
なるへしそれよりをちこちの世の書物をとりむすへくも
さかのあさりもそれにつたはりてかれかさにみするたちまちに
ひのもとのみちのうへにあふき浪にあふきはよろつ世
はそれを道としてとよみのこゑとゝのへてあ
川もとのなかれのそのさとは藤川にてあまれあ
小坂殿はかのこゝろを知りひろくあさ
きこえあるさ様は又たえさる雨なかれとくみて

こゝにえらひつたふる二千ちあまりの廿巻をなつけて新續古今
和歌集といふなり花をもてあそひ郭公をまち紅葉をおし
雪をなかむるもはしめて君か代をいのりかたはらの誰
またしこしまのみちをおもひ別をいそきいらさ神祇を奉の
ひろくめくみあはれをしるは河の流の世をさまるの其
草木のことはをかせてもそれのかさしをのへをとめ筆
なりしあのさまにいにしへのなさけをあらはしたまへの
言の紀ちの人をあまてにいにしへてみな世にあらはれ
かきのかなさけるとき永享十年八月廿三日次
ありしをわかことの集かこのをしへをひとへをぬるほ
竹のそよは露のをかさまてもたえぬ色かこれ浜のまわの

浪のをちこちのさたをつたへてその跡にさとるにそれら
あさか山の朽にのこらんそのあさ(み)ち(の)ちは
こと葉のさか葉にもしたとはの浦にみなけるにむかり
とそ思ふめかた

新續古今和歌集巻第一

春歌上

年内に春立ける日よみ侍りける

権中納言雅縁

春きぬといふより雲の年をこそ方にゐるてふ年内霞

立春霞といふ事をよませ給ける

後小松院御製

志賀の浦やよせくる色の浪の上にかすみ見られて春はきにけり

霞知春といふ事を

左大臣

いつしかと明行空にかゝる雲や庭より春のしるしなるらん

弘安元年亀山院に百首歌奉りける時春歌中に

土御門入道前内大臣

春やくる浪もこえてや立ぬらん霞にこゆる末の松山

題しらす

清原深養父

かすかなる春はみよしのゝ霞の浦しくい雲のゐる春やきぬらん

正治二年後鳥羽院に百首歌奉りける時

後京極摂政前太政大臣

春はなほあさ海の年けりて行てくるの松は雪けぬらむ

山霞を

従三位雅家

春の来る朝の姫の山まゆはかすみの衣なに富士の峯

応永十四年内裏にて人々題をさくりて百首歌

ほのぼのとまつりおく小松かけ哉

鹿苑院入道前太政大臣

三笠山あさひさしてもかすむなり春日の里の春のあけぼの

百首歌奉りし時霞

無品親王

さ柳の春のみとりはかつらきや霞にまかふ天のかく山

嘉元元年内裏十首歌合に野徑霞

常盤井入道前太政大臣

ゆふ月の霞にしかにとなれとなをかすむ野辺の松のむらたち

文保三年後宇多院に百首歌奉りける時春歌

普光園院前関白内大臣

ひとしほを色まし浦のあさみとりの松のみとりは霞なりけり

嘉元百番歌合に

藤原隆信朝臣

春きては雪もふるとみえし野の若葉のうへの雲そかすめる

春歌の中に

前中納言匡房

みよしのは谷の春日に霞みつゝ嶺の雪まに霞たなひく

後深心院関白左大臣

いはねさへ立かさねたるさほ姫の霞の衣たちそめてけり

延文二年百首歌奉りける時霞を

等持院贈左大臣

さゝ浪も春にかはりて志賀の浦や比叡の山のかすむあけほの

松霧といふを　法印経賢

松原のみとりや河に霧こめてつらぬの松か河の末の明ほの

題しらず　俊恵法師

あゆかはる堰手の河せみえさりき夕の霧そたちわたりける

建保三年名所百首歌奉りし時　前参議忠定

河の瀬に月かけ乃塩やまた河はつれ墨やかゝる春の夕霧かな

貞和二年光厳院に百首歌奉りけるに　中宮大夫公宗母

秋くれとや霧をおきて舟のいと近き浪のうへの秋

家に歌合侍りける時　後九条前内大臣

信濃なる浅間のたけはけふ遠方人もとゝめぬ霧そかゝりし

水無瀬殿にて詩歌をあはせられける時水郷春望といふ事を　参議雅経

かすむとも緑そふかき浪のうへに松のみ見えぬ春の川浪

従二位家隆

橋姫のあさけの袖やまかふらん霧立こそ宇治の河浪

嘉元元年百首歌奉りし時霧を　前大納言経継

難波津の芦代やへたつらん霧のたえまに霧そ書はへそたなひく

同じ心を　権中納言雅世

難波かた塩屋の煙立そひて霞をかさぬ海風もなく

二品法親王覚助家五十首歌に浦霞を

大納言重経

立のほる煙もそれの海風に春とや霞のわたるらん

贈左大臣 長實 家にて哥合に海邊霞

源俊頼朝臣

いつかたと霞なりけり塩かまの浦ゆく舟の見えすしもせて

嘉元元年内裏十首哥合に野径霞

藤原俊実朝臣

たとるへきいく野の霞いくへたつかとこそ見ゆれ孫妻乃浦

従三位範宗

霞のみ来ぬ野の里はたちかへりかすみのうへにかすみなりけり

遠山霞といふ事を

権中納言雅縁

春きぬと松吹上の浜千鳥霞をみてやなく音をもさへ

新玉津嶋社哥合に浦霞

寶篋院贈左大臣

明石かたさせる塩風吹なから霞をこそてぬすむ明石の浦

前参議行忠

和哥の浦のあまの小舟のゆくへもしらす霞にきえて春も霞かな

應永二年仲春重保すゝめ侍ける住吉社哥合に

霞を

二條院讃岐

春のとて見れは霞にしほの八十島かすむ松のみえけり色かはりなし

かつらきの白雲ふかき百首歌よみけるに遠峰霞

暁霞といふ事を

好阿法師

すゑや伊勢の蓋にほのぼのとあけはなれ山も春の霧

寛治二年後院蔵院に百首歌よみ侍ける時春雪

山階入道前左大臣

うちすてし峰のしら雪の消ても教の枝にいまめ残よりの

野径残雪といふ事を

権大納言俊光

跡つけし誰か白雪むらきえてわけし野への道もかわらぬ

正治二年新院百首歌合に山家残雪といふ事をよませ給うける

後鳥羽院御製

降りつもる柴のいほりの軒端にはなほ春ふかき雪

二品法親王覚助

春きても木陰つもれる雪はなほきえてまたて太山の梢

延文二年百首歌奉りける時

前大僧正賢俊

たれかつむ沢辺の若菜あとたえて春もたつ野の雪

後九条前内大臣家に歌合し侍けるに

右近中将経家

雪きゆる籬の竹の春風にこほりてかつ庭の朝露

題しらず

従二位家隆

あすか河岩波たかしきえぬ山の白雪いまやきゆらん

弘安元年百首哥奉けるに

式乾門院御匣

吉野河みなかみとほくゆく春風にあらはれてしら浪の花

安嘉門院四条

あさみとり霞にふれる花さかりかをる山はの春の色かな

文治六年女御入内の屏風に人の家に藤さける所

皇太后宮大夫俊成

萬木つくす

若葉さすかたゝかき藤は花さくやとのあるしなりけり

百首哥奉りし時

左大臣

のかれ行春のなこりのよるの雨

嵯峨院に百首哥奉りける時

大炊御門右大臣

いかにしてさきかゝる梅の花の色もにほひもおなしこゝろに

貞和二年百首哥奉りける時

民部卿為明

春来ては梅の立枝の風に吹てあたりもかほる夕くれの空

鹿苑院入道前太政大臣家百首哥詠侍りしに

権大納言

春はなほ梅の立枝の風さそふ花の香しらぬ夕くれの空

題しらす

柿本人丸

二葉よりかはらぬ松のたかさこのみとりの色はかはらさりけり

堀河院御時百首歌たてまつりけるに子日を

藤原仲実朝臣

あさ生ぬ二葉の松を引つれてふるゆきの千代をかぞへん

圓融院御時紫野にて子日し侍りけるに

民部卿文範

紫の雲松の年をばきみにゆづる我も千代ぞ人にひかれん

文保三年百首歌奉りける時

三条入道前太政大臣

うちれのゆきはゝもれとみぬるまゝに野辺に出てや雪まをきえまし

若菜とらなん

按察使那朝

閉まてら深き雪消やらで野辺のわかなも下萌にせん

建保四年後鳥羽院に百首歌奉りけるに

従二位家隆

春くれば星のくらゐに影見えて雲井の庭に出る白馬

弘長元年後嵯峨院に百首歌奉りけるに

後九条前内大臣

されは又山田の原の雪きえて神代のためしひかるつきなん

延文二年百首歌奉りける時

中園入道前太政大臣

霞しく野辺のみどりは白妙の袖にかさねてまたつむらん

権中納言為重

雪きえて水をとけて川上の岩ねに春の波はつかる橋

若菜を讀侍りける　成恩寺関白前左大臣

しら雪のきえぬを人は春とてやよその野沢にわかなつむらん

百首歌奉りし時　權中納言雅世

きえのこる野への緑にみえてけり春の日数をしらぬわか菜は

嘉元百首歌に　中納言為藤

小田のあせに水をせきいれはせ川柳たちて春風そふく

正治二年百首歌奉りけるに　二品法親王守覚

霞たつひさにあさる雉子も心あてよや霞の川むらん

最勝四天王院の障子に武蔵野かきたる所に　前中納言定家

むさし野のゆかりの色もとひかねつみなからかすむ春の若草

貞和百首歌奉りける時　前大納言重資

杉むらのこえし緑をまつみえて春に霞きの林の下草

前中納言雅孝

三とせく焼野のきゝす羽草ものこさて春野への色哉

正治二年歌合に若草をよませ給ひける　後鳥羽院御製

春きてもとつとりの若は生やてむらくあをき野の末

百首歌めされけるに早蕨を　崇徳院御製

春の野に雪はふりつゝきとつもりしも見つる下蔵かな
なかりせと　栄仁親王

山川のみなそこ浅みすむ水の折はいつもかはらぬ雪の下蔵
梅花をよみ侍りける
二品法親王尊胤

消のこる垣ねよりまつや咲けり雪にかさぬる梅の初花
文保三年百首歌奉りし時
後西園寺入道前太政大臣

きえなからかつちるとも見ゆる梅の花宿の垣ねにあは雪
貞和百首歌に
後福光園摂政前太政大臣

梅花それとはみえて山もとの霞そかほる春の夕くれ
左大臣家にて三首歌よみ侍りし時依風知梅花
といふ事を
前大僧正満済

よそまても風のたよりはいつもあるやとふ小野の梅か香
梅花遠薫といふ事を
前参議雅有

きさらきを風のさそひてたなひかは香やかてかほる木の間の梅
文治六年女御入内屏風に人の家ある庭に梅
咲たる所
前中納言定家

春近の匂ひもさそふ春風にふりぬる木の庭の梅の花
同七百首歌よみてまつりし梅
従二位行家

かほりかへつる妹か袖にかけて折りきてつゝむあまりの花

落梅といふ事を　称名院入道右大臣

き人のこゝろもあれはてゝまたは梅かゝにほふ軒の春風

百首御歌中に　土御門院御製

梅か香もたか袂（袖）より薫らん折る人の春のゆふくれ

梅風関といふ事をよませ給ひける　今上御製

色も香もたゝひとへにあらし咲みちてあたりにあまる梅か香の風

咲梅の枝につけて瑒子内親王にたてまつりける　瓊子内親王

さそひし風の情にこそ梅か香はきみか袖にも宿の梅かえ

瑒子内親王

こそそれみちをかひあまるにほひとそしるなれ世の梅かえ

寛治百首奉りける時梅薫風といふ事を　太宰権帥為経

たか里とにほひきつらん梅もさかりの匂ふ空の春風

百首歌の中に　式子内親王

なかめせんかなしき人の春まても御かむ宿の梅かえ

貞和百首奉りける時　等持院贈左大臣

袖にまつ匂ひそうつる垣のまかきの梅の春風

題しらず　源重之

風ふけの夜のまさくらいみ梅花折てたもとにうつりにさん

らやたなきてもぬれぬ梅花ちりかゝる袖をさへ泪の色は

侍従為敦

海辺梅といふ事を

あま人の塩たれし袖を匂はし難波の春の梅の下風

式部卿邦省親王

里梅を

法印慶運

尋ねてそなかゝの里の春風にまかせてこそ梅かをはすれ

延文百首奉りける時

前大納言為定

思草松かの梅はいあけかたの霞にもれし春雨の空

春雨を

一品法親王寛仁

春雨のふるいともみえぬ緑の糸のかつ見えてぬれぬ

家に三十首うたよみ侍りける春雨

入道二品親王道助

花とみるゆふへやはれぬ春雨に山はしかすみわけとかゝる雲

弘長百首奉りける時柳

衣笠前内大臣

さほの山霞はたなひきそへて河そひ柳春めきにけり

柳を

後鈍院前内大臣

春風のふきみたれつゝ白露のむすほゝれたる青柳の糸

徽安門院小宰相

ぬきとめぬ玉とそみゆる春風のかきみたる青柳の糸

入道二品親王道助家五十首歌に春柳

源家長朝臣

龍田川むかふの岸の青柳はいくとせかけて春をしるらん

延文百首歌たてまつりし時春月を

民部卿為明

かすむ夜の光を花と白雲のかゝる月の桂も春もしるらん

永和二年百首歌たてまつりしに

権大納言為遠

春はなほ夜のねさめはさびしきを霞にくもる月の影哉

建保三年名所百首歌めしけるによませ給ける

順徳院御製

玉嶋や河瀬の浪は霞みして霞にかゝる春の夜の月

貞治百首歌たてまつりける

山階入道前左大臣

なかむるはたゞあはれにて春の夜の月にそへても宿のあはれ

題しらず

進子内親王

難波かた入江の葦に風吹て霞にしづむ浪の上の月

前中納言有忠

播磨かたかゝる光は月のとぢかすみて霞にかすむ春の夜の空

嘉元百首歌たてまつりし時

権中納言公雄

いつくにも春の浦風ありとてもたゞしる夜半の月の影哉

二品法親王覚助家五十首歌に　　法印長舜

いとふかな我なかめしもみむとせし春の月くもりはてたる雲のかすみに

文保百首歌奉りける時　　後照念院前関白太政大臣

春の夜の月にかすみて帰る雁いかなるかたにさそはれて春をやなかん

帰雁を　　前大納言為家

春くれは雲井の雁もけさみえて霞てかへる志賀の浦浪

後小松院に人々十首歌奉りけるに海辺帰雁　　権中納言雅縁

名残あれや霞の袖に塩なれてかへる行かたのすまのうら

春雁歌中に　　後亀山院御製

春はまたかすむともなきにほの海やなれし雁の衣手のかな

嘉元百首歌に　　二品法親王覚助

ひとり行雲井をさしてなくさめてかへる春の雁かね

弘安百首歌奉りける時　　前大納言為氏

都にはなにとならひて春の雁越路の山の名をわすれけむ

貞和百首歌に　　後福光園摂政前太政大臣

春にあかれたる雁かねも霞うすき雲の玉川さ

文永二年白河殿にて人々七百首歌よまれけるに深更帰雁といふ事を

前大納言経任

さくら花のこゝろにまかせて雲井の桜は法にもちらん

春の歌の中に　二品法親王覚誉

おしなへて我まさに春の桜花ちるもめてゝいつか忘る哉

百首歌奉りし時　待花　前摂政左大臣

咲やらぬ花まちわひて山のはにたゝ人なかめかね春の夕雲

桜の歌　今出川院近衛

さそはてちる待さくは経てふかきさかりの桜花かな

花といふ事を　権大納言忠光

いまそとも花をかさねの山の端にみえぬ桜の八重の白雲

左大臣に侍りし時新玉津島社三十首歌よませ侍りける桜を　按察使公保

あらしなや雲にまかへんみよしのゝ山さくらもかすむ花の白雲

百首歌奉りし時　初花　前大僧正義運

咲そむる一もとの山のはの雲まにみゆる花とこそみれ

正治百首歌奉りし時　後京極摂政前太政大臣

花の色はあかれぬとそおもふ桜ちるみねの春の白雲

正治百首歌奉りける　祝部成茂

ちらしをちらぬもおなし心そせちにとも風乃ことなる木の本の春の鑑

家にて人々花歌よみ侍りしに

左大臣

ちるはなもちらぬ程はたのしみて花乃なきもよしさき

よろつ代のたか

新續古今和歌集巻第二

春歌下

百首歌めされし時不見花といふ事をよませ

給ふ　今上御製

雲とさて霞とそ見て足引の山乃桜は色ハ匂ふともなし

延文二年百首歌奉りける時

後深心院前関白左大臣

桜色は峯よりくもりて花の色て匂ふ朧乃空

題しらす　清原深養父

咲よりその山への桜花かすみたちぬといひそめけむ

花歌の中に　源満元朝臣

松もひき雲も花にしかのいつかはみる世にあらはしき山桜かな

千五百番歌合に　正三位季経

花ゆへもともにひきかへし心さへ行白雲に春の山風

貞和二年百首歌奉けるに

後岡屋前関白左大臣

遠近の松のみとりに紛ぬは花をさくらとしらまし

文治二年百首歌奉てまつりける時初花

皇太后宮大夫俊成女

春といへは花は桜の時なれとや雲はかゝる峯の白雲

康安二年内裏にて題をさくりて歌つかう

まつりける時花似雪といふ事を

儀同三司 言

咲まてと都にみえし白雲のまかひに山さくら哉

山花といふ事を　法印經賢

きのふまてわれはしらさる山の花を雪とこそみつ

松のしつえと　入道一品親王永助

高砂の尾上の花はさかりにて清き松の雪とみえける

弘長元年百首歌奉りし時花

衣笠前内大臣

みよしのゝ山の松のたえまよりみゆる花の色は桜かな

建保三年歌合に春の朝といふ事を

前中納言定家

こゝろあるあさけの山乃松風をかすみにこめて花乃香そする

題しらす　従三位頼政

あつまやのさ山の峰のたかねにもあらて花のみたれ

至徳三年三月仙洞にて人々題をさくりて三十首哥
つかうまつりけるに花といふ事をよませ給ける

後円融院御製

桜さく木ゝの下陰の宿なれはおほよそ人もあかすみよし野の山

住吉社に奉りける三十首哥に山桜を

儀同三司　資

吉野山瀧のしらいとくりかへし見てそあかぬは花の色哉

新玉津嶋社三十首哥に

入道前太政大臣

みよし野はちるをも花の陰なれは風さへよりて志らぬ嵐を霧を

前大僧正果守

しらくもそ花と見えける花にかゝるをそへて九重の花

朝花といふ事を　中務卿宗尊親王

見れはむかしの空の雲のうへなからあさ日にうつる野山

花哥の中に　平宗宣朝臣

かつ見てもあかぬ花をそ春風はよその色をもちらすなり

百首哥よませ給ける中に

後小松院御製

花いろの幾春をかへ咲初て雲ゐの春の色を見る

建仁元年後鳥羽院に五十首哥奉りし時花を

宮内卿

庭そとの霞は小嵐たて花もてはいけとらむ志賀の山こえ

千五百番哥合に　惟明親王

みよしのの花をさかりと生れきは春の宿りのかりそめにまれなと

法金剛院乃花のもとにて人々あまたさそひて哥読侍りしに

二品法親王守覚

春の風たにまつ木陰に露きえてなれおちの花におくれぬ

花哥中に　西行法師

松か枝の山かけは花の色もとしふる年ゝの色そまさらん

月前花といふことを　頓阿法師

白雲のたなひきわたる桜さく峯の霞を庭の月のかけかな

千五百番哥合に　後久我太政大臣

あらしふくやいかにつれなき花のあたりに霞の都の月影

延文百首哥に花　一品法親王法守

桜のかゝる山路は風たえてさそふや花を月にみるらん

五十首哥よませ給ひける中に

後鳥羽院御製

都人それともいはすうつろはむまて花に宿かる志賀の山こえ

大原野のさくらさかりなるに人々にさそはれて

藤原實方朝臣

きてみすは大原山の桜花風のたよりにあてしらまし

弘長元年百首哥奉りけるに花

藤原信實朝臣

家にてはいそちの梢を桜にかはりて見る花の色かは

康安二年春比将軍家十首哥合によみ侍し桜を

二品法親王覺譽

かひなしや家路出て桜ちらしゝ宿のあとをたつぬる

後普光園院家百首哥の中に

花にかゝる梢をかくす白雲はいつもやみよし野の山

久世入道前太政大臣

春哥の中に

前大僧正道意 寺

かきつくる花は小倉の麓を春のすみかとたゝれやはする

後九条前内大臣家哥合に

前参議忠定

冬ごもるなく散りはむすぶらんやはなかりける峰の花かけ

貞和百首哥に

中園入道前太政大臣

思ひやれかくはねたにそ忘れゐるみよしのゝ花の面かけ

前中納言為秀

人の世とともに吉野を見てこれるなれこそかはらぬ宿の桜を

徽安門院宰相

さくらいつの春にてなにのさくらにやありしよの花

瀧花を

源義将朝臣

春はちる花をちらす中にかけて瀧をなかすやみえ

建保四年内裏哥合に

常盤井入道前太政大臣

山桜さくら比の霞にはみえこそまかへ花乃色香を

建仁元年二月後鳥羽院に五十首哥奉りける時

参議雅経

冬は雪とひし風になかりけりそのはしにかれさし山桜かな

弘安元年亀山院に百首哥奉りける時

前大納言為世

おしむとも花の風のたよりにもあはれ梢や花のちるらん

おなしき三年春宮乃御方にて人々千首哥よませさせ

つかうまつりける花随風といふことを

前参議雅有

ちらしもあさくにちらてのこれるつれなきものを山風

千五百番哥合に

寂蓮法師

吉野河岸の花の梢をなみもせはさそふ雪か小春か山風

百首歌奉し時読る

左衛門督實雅

山たかみ峰の雲井のかけはしに吹くる風に花やちるらん

河上落花と云事を

権中納言雅縁

雪とのみ流れそゝく松の山風にちりてくたる花の浪

千五百番哥合に

参議雅経

山風の吹のまにまに吉野川花の浪そたち渡る

永和二年百首哥奉りし時惜花

後入道前内大臣

あかさくら花をしのひしてふるはなからひの花のかけ

深守法親王

しつかによかりてさくらさくとおもひしわか身の[illegible]

中納言家持

鶯の鳴ちらす[illegible]春のはな[illegible]さとのをち[illegible]

千五百番哥合に

従二位家隆

鳴とむるもとそみつらくひ[illegible]古巣の花の雲

左大臣によませ侍し新玉津嶋社三十首[illegible]

[illegible]

権大僧都尭孝

[illegible]

延喜御時奉りける哥の中に

紀貫之

[illegible]桜花[illegible]

崇徳院に百首哥奉りける時

皇太后宮大夫俊成

ちる花のをしさ[illegible]世にも春の山かせ

[illegible]知

藤原教雅朝臣

あさにちる桜を風のやとりまちて[illegible]

住吉社によみて奉りける哥に読む

源経氏

かきくもる雲の都とはなりてちりかかるらん花をまたん

春哥の中に　法印浄弁

分きて我なかにふかき根さへつもりぬるか花ゆゑの香

新玉津嶋社三十首哥に　前中納言為遠

いつくをかきみかほる霞にもとかくれてとかむ白雲の香

道空上人

木の本の庭のかけ吹風のあとにふる花の白雲

花下送日といふ事を　正三位義重

春をまつ心はたえて雲井まてにほふ花のかけの香

題しらす　入道一品親王尊道

花にこそ心をかけし年月のかさなりてなかめぬるかな

文和二年白河殿にて七百首歌　後光厳院御製

ほとときすやまとなるとも年にそへてさくらはなにまさる

雪とのみちりかふ花のかけに桜木のもとはふきまかふらん

曲水宴の心を　権中納言家賢

めくりあふ今日のけふはやよひのみつのながれにかかる花の色

文治六年女御入内屏風に　皇太后宮大夫俊成

こころ

春霞のかすみにけりな三笠山このもかのもの花のさくころ

家の百首哥合に雲雀といふ事を

後京極摂政前太政大臣

かり場の霞をこえて末さかれ朝日ゆく空に雲雀なく覧

松かけに

前中納言為家

霞める空をわかぬ夕暮の京にたつやなく雲雀哉

権中納言雅縁

さほ山の霞をこめてとみてやなく雲雀野原の水の下に影見ん

嚶子鳥といふ事をよませ給ける

土御門院御製

峯の梢霞の山に風ふかばこゑも花のゆふべまたずはなき

順徳院御製

なかやまけ其の梢にふかきつゐにかゝる人も我も

正治百首哥に雉を

後京極摂政前太政大臣

かり衣すそ野のきゝすゆふくれにむらさきわけて萩の焼原

崇徳院に百首哥奉りける時菫菜を

皇太后宮大夫俊成

沢のほとりふるきつゝみにすみれつむまつ人もなしむかし恋しき

建保元年内裏哥合に水辺躑躅

前中納言定家

龍田川岩ねのつゝし影みえてなほ水くゝる春の紅

文保三年百首哥奉りける時

前権僧正雲雅

春をへや末摘花の露に咲さく岩清水にしられ

里款冬を　　後二条院御製

くちなしの色にいそその里は井手の花咲らんやなをつけそめし

百首歌たてまつりし時款冬

藤原雅永朝臣

いとゝなを人にはいはぬ色をいはせ山中なる川の山吹の花

松下款冬を　　二品法親王尊胤

おもふ事いはぬ色なる宿や人めつゝみて花はさけるらん

貞和百首歌に　　入道二品親王尊圓

玉川の流にたてる山吹をまれなるもゆかむ井手の里人

等持院贈左大臣

松とてもふかき色そへて款冬の花ちる里の春そくれゆく

住吉社にたてまつりける百首歌の中に

大納言重光

咲かゝる松のした枝に色はえてその木本に紀春の藤浪

きしやう住の江の藤花咲ぬれはなをも松にかゝる浪

中務卿廣平親王

むらさきの雲にまかへる藤浪を左になをく人のおもふらん

延喜御時藤壺にて藤花の宴せさせ給けるに

三條右大臣

つかうまつりける

春まては雲井に匂ふ藤の花ちとせの松にかけんとそおもふ

貞和百首歌に

後福光園攝政前太政大臣

ちよしるやつ葉く咲かへて三代まてかはらぬ小の萩なる

百首歌奉りし時　左大臣

十かへりの花はゆかりやむかしみの庭にもえたる松の藤浪

藤花随風といふ事を

津守国冬

吹かくる松の藤波なひくなり舟のまも風にまかせてやゆくらむ

百首歌奉りし中に池藤

伏見院御製

春ふかき色をそへてうつる池の藤浪宿る池にさへ波

文永二年白河殿にて人々題をさくりて七百首歌

つかうまつりけるに浦藤をよませ給ける

後嵯峨院御製

むらさきの河きやう色に春ことに藤咲かかる松かえのなみ

藤花をよませ給ける

土御門院御製

あかなくに田子の藤浪見にゆきてかへさの袖も色や染らん

式乾門院御匣

わか宿の松にかかれる藤なみのいまやさかりの春の色なる

後小松院にたてまつりける百首歌の中に

まつりことの時藤を　権中納言雅縁

むらさきの藤をのみ家にかけてや袖のたもとに藤の色ある

題しらす

前大僧正禅守

去年の神代もしらぬ住吉の松よりもれて岸の上に生

文保百首歌に　後照念院前関白太政大臣

大空は春の別のなごりさへも松より上に花の白浪なりけり

峯の春風とぞみゆると

従三位雅家

花ちるとなに恨みん吹風のはげしき春の色にまがふ物は

弘長百首歌に　前大納言為氏

きえかへるとひとりのみよろこびあかぬひの花散春のくれ

千五百番歌合に　後京極摂政前太政大臣

初瀬山花の春風吹そへて雲のほかさへ春の夜の月

嘉元元年七月歌合に暮春雨といふ事をよませ

給ける　順徳院御製

花さそふ風もうらめし霧にたちまがふ春雨の空

前大納言為家

あすよりは花の名残にしたふとも春はけふ暮ぬる空に

貞和百首歌に

いさやさはこえんかなて白浪のあとなき春の末の松山

中宮大夫公宗母

建保名所百首歌に

正三位知家

ときはなる春のなごりをまつならばたむけの山の府

百首歌奉りし時　[illegible]春

権中納言雅世

尾上の山桜ハ花もかすみてとをからぬ遠山の嶺

後三条入道前太政大臣

篝火の影ハ流れてよかはなる山あらしさへ聞ゆなり

建仁元年新宮歌合に山家篝火といふ事をよみ侍ける

後鳥羽院御製

篝火の影も霧にのこれるを宇治の河せに見えし見えつる

嘉元百首歌奉りける時

万秋門院

秋の夜の月をかさしやゝもすれハ人の袖の露に宿る月

永和百首歌に三月盡

前中納言宗遠

言ふ今日を惜むあすいなむ此河そゝ春を送るとも山風の也

新續古今和歌集巻第三

夏哥

更衣のこゝろをよませ給うける
後小松院御製
けふはまた衣を春にたちかへてかへるもをしき花染の袖
夏衣めさるゝ涼しさてよおもひしらるゝ

今上御製
今朝よりの袂もとくをしみても花の香ものこさぬ夏衣かな

首夏風といふ事を
成恩寺関白前左大臣
吹風もまた残るやいとゞしも花の香のこすすゞしき袂のうつりか

題しらず
前中納言宗重
夏衣たちかへてける袖にもなほ残る別れは花の名残か

中納言為藤家にて三首歌講しける時残花と
いふ事を
頓阿法師
咲ぬやといまこそとはめ山桜春は過ぬるみねの梢を

家にて題をさくりて三十首歌よみ侍りけるに山新樹
といふ事を
左大臣
名残とはいはせてけりな山桜花にそ夏の木末なりけり

夏歌の中に
法印経賢
夏のきていく日もへぬに山城の岩瀬の杜の杉の緑

住吉社にたてまつりける歌の中に卯花を

後京極院入道前関白前左大臣

花さそふ雪とそみる山桜ちりのみまさるひまさへ今朝

文保三年百首歌の中に

普隆利光院前関白内大臣

朝かすみまよふ里の卯花を今いく月のひかりとかみる

文治六年女御入内屏風に賀茂祭わたる所

葵かさしける人あるに

前中納言定家

をさやかにかけしもしるく今日の日はわかれてしかも人もかさしつ

千五百番歌合に

惟明親王

ほりかねの（？）まつやまもりのはつしくれ

題しらす

中務卿宗尊親王

郭公いかにせよとて人郭公まつはさきたつ三なつきの

侍従行家にすけゝるけさの中に

源頼元朝臣

時鳥まつらむひとこゑつゐにこのあかつきの郭公

千五百番歌合に

後久我太政大臣

郭公またつけくる夏の夜の月ともに明けぬとおもふにねさめして

枕子殿にいふかたに年をへて

後二条院御製

時鳥待得てつけくるつましかりといふ世の枕のむらさめの

弘安元年百首歌奉り

大蔵卿隆博

浮世をは哉つはなれし山の端にても猶すまれけるかな(?)秋の

後深草院大納言典侍

なきのこる一聲(?)をたのみつゝ山ほとゝきすまつ夜ふけぬる

安嘉門院四条

さゝ雲ゐにもなき(?)ゆく声の時雨ふる雲まよふ月の夜な

前大納言為世

なほさらに郭公を聞(?)しかとあはれもまさりぬる哉

前大納言為兼

郭公こゝろをきけば(?)なくほとの夏(?)のねさめにきくそ(?)あはれ

嘉元百首哥に郭公

法印定為

露ゆく山路は家やちとほしくるゝ日の一むら雲に

藤原長綱

花やに月の(?)の時雨日のかはりは時雨(?)しぐれて

なけやなけ山郭公声たてゝ我こそしらぬ人のきくへくに

最勝四天王院障子三輪の山

前中納言定家

言ふには三輪の杉村時雨ゆくその杉をしるしにて過

前大納言経房家哥合に郭公

寂蓮法師

あくかれし人の心をかへてきく夜半の雲井になくや郭公

文保百首歌に　後照念院関白太政大臣

たれゆゑの涙なりけん郭公忘れぬ声の夜はの枕に露

正治二年石清水若宮歌合に郭公　法印幸清

きゝもやとねぬ夜ひとりをあかすかなあまたの声は山郭公

百首歌奉りし時関郭公　尊円親王

ゆきかふ関守月きよみ郭公ことのは神山にいまもゆふつけてなく

松のしつえを　法眼慶融

郭公さ月まつまの声をたにをしへてそきく松の宿の夕暮のそら

入道二品親王性助

かくまてに一声をたにをしみけり月に待れし郭公かな

夏歌の中に　宝篋院殿左大臣

さのみやとおもひなからも時鳥またるゝにつけて声はまれなる

郭公ながらふるさとの一声のまゝとふこともあらはれてすきさき

家に五十首歌よみ侍りける時　式部卿邦省親王

雲井にもあかぬ一声たにまちつゝかくてきゝけり

廣覚院入道前太政大臣家百首歌に　権大僧都龍覚

まちえたる今夜の月のひかりにはなくほとゝきすたゝひとこゑを

貞和二年百首歌奉りける時

後三条前内大臣
郭公なをまつとしもいはぬかな八声なくらん

文保三年百首歌に
津守国冬
かくさする夜のみしかねありてたつやさ月の森の杜

前権僧正雲雅
鳴捨てすけにふかとあれし山の井にあそてるあらの郭公かな

百鳥乃声あきされぬ波の関郭公とふ筆をのせ

待行宿
今上御製
月を待山は清しはつかなる空の雲まに声きこゆなり

左衛門督実雅
まつくまにそのなをとやまず郭公ゆふ月夜にこゑきけはなくらん

夜前郭公
静仁法親王
郭公たかひとりなのよまつ夜なからつきぬなみたのあけのそらかな

後小松院にて人々題をさくりて五十首歌詠侍し
まつほとの小郭公

権中納言雅縁
鳥かへる山さくらに一声はおもひつゝけしきくの雲井よ

題しらす
皇太后宮大夫俊成
待えてもいまはたかけをみるかなわか身をあつれ

又月河のをとに郭公を
式部卿有親王家にて侍

人のけは引ぬへくもかは都にあやめそむすふ軒端に

嘉元百首歌に　二品法親王覚助

めくりあふおもひさ月の時ならてもねをあはれ

五月ころ小徽子女御のもとにおほせ事ありける

天暦御製

いつそくと杉りふんてあやめの根のなかくそ時もきらせやさね

正治二年石清水若宮歌合に

よみ人不知

時鳥いはなくにとまるいまそ宿の軒のあやめそきてくちなん

貞永元年七月歌合に　関白摂政

後鳥羽院下野

ゆてゝたいつくし山路の都にも船のうへ雲はあやめて

藻壁門院少将

さみたれのふるつかれてへ時鳥さそふ夜の中におもふへき

源家長朝臣

旅衣いつかさつきもかけてけり山時鳥なかそうしらん

正治二年百首歌奉けるに

三条入道左大臣

かつまさのまこも枕にかゝるよりあやめにかゝる軒の

文治六年女御入内屏風に菖蒲刈る所かきたるに

家ゆきかふ人あり　前中納言定家

あやめ草なかき契をいのるへき千代の五月とそ思ふ

夏歌の中に　　後京極摂政前太政大臣

冬の名残の雪を吹風にとそこの川なみは末ゆく時

左大臣家三首歌に早苗を　　前大僧正満済

時きぬと山田のさなへあさ衣たゆむまもなくとる早乙女

夏草を　　前中納言為秀

夏されは枯わたりつるのみかりはおもひしとおいその杜の下草

建保三年内裏歌合に野夏草　　参議雅経

夏草はみとりをそふるいかにしてあれぬる野への露わけつらむ

従三位親宗

いかにせむあれぬる野への夏草にしけりて根ふかき露わけつらむ
松かけにやともとめせ行きぬる

後小松院御製

御幸せし千代のふる道たとりてもたれかふみわけむ小篠の夏草

千五百番歌合歌　　隆信朝臣

旅人の衣もかはく朝露に夏野の草はさかりなりけり

夏歌の中に　　中務卿宗尊親王

うちなひく野かひの駒の夏草に夕風わけて涼しさそ吹

凡河内躬恒

しけさのみ日にそひまさる夏草のかりそめにたにとふ人そ遠

延文百首歌中に盧橘

民部卿為明

うき旅のこゝろ我つけて白雲のおりゐる峯の軒のむめかゝ

夜梅といふ事を　　雅永朝臣

時わかぬ色のそれともみえぬよのむめはにほひを宿とむるかな

百首歌奉りし時　　権中納言雅世

春の夜の花ちる花の色そとは世にしられむも嵐の風のさそふなりけり

永享元年内裏にて人々題をさくりて歌つかうまつりける時梅薫袖といふ事を　　権大納言為遠

立よりてなれしはやかてうつさまし袖にまさりし軒のむめか香

百首御歌の中に五月雨

五月雨は軒のしつくもたえまなくさなからくもる松の下風　　後円融院御製

正治二年百首歌奉りし時　　参議雅経

五月雨はその汀をもわかすしてなかれそふらん井手の玉水

新玉津嶋社三十首歌中に　　後八条入道前内大臣

浪こゆる岸の玉もの五月雨にぬれてもふかきあしのしたね

頓阿法師

五月雨の汀まさりてしら玉のみたれもやらぬ波のしたかけ

進子内親王家春日

松山の峯の嵐にすむ月は雲のかよひ路たえてはれける

前中納言定家

まきのやのかきねの雲は空にして思ひさえたる月の影哉

建保百首歌に

中園入道前太政大臣

晴わたる空にもみつる月影にかさなる雲のたえまなりけり

寛喜四年日吉社撰歌合に

前大納言為家

天の原雲やは山の数ならてわけてもなかき月の影哉

夏歌の中に

中臣祐臣

涼しさは袖にそみつる月影にまつしら浪の布引の滝

百首歌奉りし時

左大臣

山川の岩せきかけて久かたの空をうつせる月影の雲

左近中将定親

五月雨に淀の川岸水こえてあらぬかたにも月そすみける

左大臣に奉りける新玉津嶋社三十首歌に

前右大臣

加茂川のつきはしわたす月影のまたあけぬよをわたる橋姫

松竹結緑といふ事を百首歌の中に

権中納言雅縁

雲のゐるかつらき山の月影にまたやとりける夜はの時雨

結ひける月影をいつる哉

藤原雅朝

篠すゝきいとかりねのかり臥の夢の短き夜半の比
正治百首歌に　従二位家隆
いつすゝみ山かけの衣ほすとも涼しき袖の露ふかみ
涼衆鵜川に篝りのかけ
後嵯峨院御製
かゝり火は山陰くらき大井河月かとて見る舟なかの
夜ふねの中は
一品法親王尭仁
いはまくゝ竹やしきかたを鵜河のめくるしつゆか蛍すなは
従二位家隆
蛍まつのつれ風さはの下くさをゆきとやゆかしかりらん
貞和百首歌に
前大納言公泰
山陰のくさかりみちのそこみえて鵜川その波に蛍きれ
弘長元年百首歌に
なかむれはかてく鵜川せの中なる涼しやみかりゆく
蛍とそなる
源光正
後九条前内大臣
こと岩のかけの水やとる影もたえぬみなかみやとりかぬ水のみえはて蛍を
藤原雅親
池水のいひかくれかわりひとやめてそのことこゝろ蛍たつらん
左大臣よりすゝめ侍し新玉津嶋社三十首歌に江蛍
前摂政左大臣

わかの浦に猶浪よるとはおもひても雲ゐのかけやそてにやとさん

権中納言雅世家にて人〻三首歌よみ侍けるに

蛍を　　源持之朝臣

秋ちかき雨の名残の軒ちかくたえ〳〵みえてゆく蛍かな

水鶏を　　前参議教長

我宿とたゝく水鶏やおもふらんさゝ枝とあくる柴の板戸を

延文元年六月内裏にて三首歌講せられける

禁庭夏月といふ事をよませ給うける

後光厳院御製

くも風さ夜をそへて玉すたれみかきにすめる夏の夜の月

後山階前内大臣

いつくより秋のけしきをかよはせてすゝしき夜はの夏の月

権中納言為重

暁ちかくなるまゝの荻の葉の露にそやとる夏の夜の月

後小松院にて題をさくりて五十首歌つかうまつりけるに

江朝夏月といふ事を

権大僧都尭[illegible]

月を猶浪のうら半の明かたに夜さへ舟をとめてみる哉

鹿苑院入道前太政大臣家百首歌に夏月

権大僧都尭尋

風とほる月にはおもてみしか夜の雲のいつくをゆくらんなれ

延文百首歌に小松のかけを

入道一品親王尊道
すゝしさはわかりの宿とみえいは夜嵐のあとにすゝしき月やのこらん

夏月寄竹中に
後小松院御製
おとしけき竹のさ枝にみたれ葉のをかしく月をみかくすかせさ

建保名所百首に
皇太后宮大夫俊成女
夜ゝるはみなせの篠原わけそへてみえぬ露やふかきゆく

郭公稀といふ事を
養徳院贈左大臣
いとはれぬその五月をまちえてやあかつきの声さへすくるゆく

崇徳院御時百首翔更恩郭公といふ事を人ゝよませ
給けるに
皇太后宮大夫俊成

ほとゝきす鳴つる跡に時鳥ゆくをあくる月乃なこり

瞿麦を
中納言家持
我宿のなてしこの花咲にけり手折てひとめ見せん子もかな

後小松院にて人々題をさくりて歌つかうまつりけるに
前右兵衛督為盛
咲くさの花のいかなるかきねにて数あるものをあはれなりけん

蓮をよめる
前大僧正隆源
夏の日をかくして池の蓮葉に夕露こほす風そすゝしき

百首歌奉りし時夕立
左大臣
夕たちの雲のあとにはいかならむそてもよりにすゝしき風の音かな

延文百首に松かせといふ事を

民部卿為明

いさよひの月の出しほにさそひきて秋のよふかき松の風かな

貞和百首哥奉りし時

等持院贈左大臣

こゝろさへはれぬをすまし風のこゑくもらぬ夜半の松の音かな

嘉元百首哥に

法印定為

晴ぬるか雨の遠山すきぬなり嵐の末の松の尾の声

氷室をよませ給ける

土御門院御製

夏とおもふ心やけふのひむろ山松の嵐にふもとの水

松かせといふ事を

順徳院御製

限あれは富士のみ雪にさゆる日も白雲のたちゐる山の下ぞ涼しき

延文元年六月内裏にて三首哥よませ給ひける中に

納涼といふ事を

後福光園摂政前太政大臣

谷かけに松は柳にみえぬらむ涼しさまさる夏の日の夕

みな月のせみの風すゝしくて村雨かゝる影のすゑ

たゞ此夕のゝ秋をこそまて

後深草院弁内侍

きのふの萩の下葉に露ちりてすゝしくなりぬ秋風の声

野径納涼といふ事を

前参議雅有

日影もるみきはにちかき玉柳やみまてすゝしき露の本

元亨元年九月亀山殿にて人々題をさくりて歌よみ侍りけるに水辺納涼のこゝろをよませ給ひける

後宇多院御製

清滝川なかれもとほし山陰の岩ねの水にすゝしき夏はかくれ

新玉津嶋社にて三十首歌よみ侍りし時

西園寺前内大臣女

すゝしさは夜はにかはらぬ梢かな山の岩ねの松のした陰

月前逐涼といふ事を

俊頼朝臣

清滝川山かけの岩こす浪の月の影さへゆくまて秋は立そひ

千五百番歌合に

二条院讃岐

夏の夜は月のかつらの下紅葉かつかつ秋のひかりをそ見る

住吉社によみ侍りける歌の中に

入道前左大臣

秋ちかき月そすゝしき夏衣袂にやとる夜半の秋霜とそ見る

夏夜といふ事を

勝定院贈太政大臣

袖の上の夏の衣の露やかゝるらん暁ちかき袖の上の露

儀同三司第にすみ侍りける小野社に三十首歌よみ侍りし

納涼

後宏院贈内大臣

めかれせぬ松やかせひく夕風の松にすゝしき声の夜の風

後小松院にて人々題をさくりて歌よみ侍りける

なには杜納涼を　権中納言雅縁

手をまていたの杜のあきれはからん杜の涼のすゝしき

新玉津嶋社三十首哥に　法印定巡

蝉の声衣手すゝしなつの河たちかさを山陰かく

建保名所百首哥奉りける時

うつせみの涼の聲や涼さらん信太の杜の千枝の下草

千五百番哥合に　従三位範宗

大納言通具

夏とは知らてそ杜の風にのみ秋もあはれたのしきの森

文治六年女御入内の屏風に河のほとり六月祓

しらふ布　皇太后宮大夫俊成

君かなかのみそきは流る河原にて千年すめとそ祈ぞかれ

前中納言定家

みそきして浪に河原に千年をもいく世を山のかみも数へむ

夏越とふらん　前大僧正果守

さとへみなひとへて三輪河のきよきなかれに越すと

千五百番哥合に　土御門内大臣

みな月のさくる河のよるのすゝしき水の瀬の

貞和百首哥めされけるつかうまつりける

光厳院御製

桜川さけかへる波の涼しきにさゝかすの杜のまさる

建保四年内裏歌合に

前大納言経通

きのふまてゆふなみの立田川あさつきさらはかはる秋かせ

新續古今和歌集巻第四

秋哥上

七月一日のあしたよみ侍りける

鎌倉右大臣

昨日こそ夏ハくれしか朝戸出の衣手さむし秋の初風

千五百番歌合に

前中納言定家

水茎の岡のくす原吹かへし衣手うすき秋の初風

貞和百首哥に

入道一品親王尊円

秋きぬといふにつけたる明かたのねやもる窓の荻の下風

初秋のこゝろをよみ侍りける

皇太后宮大夫俊成

萩か花色にしむ野の初風はふきそめしより身にしむかな

百首哥奉し時秋の哥

二品法親王慈道

吹つたふ山かせの音も宿ちかくてや秋ときこゆらん

浦の秋といふ事を

侍従俊成

山かせと吹もまさりし玉藻かるあまの衣の袖の秋風

秋哥の中に

養徳院贈左大臣

それとなく浦よりさそふ夕風にふけ行空の秋をしるらん

建長三年影供哥合に初秋露といふ事を

前大納言為家

玉敷の露のそらと見るまて今朝の袖にぬれし秋のはつかせ

延文百首哥に早秋を

一品法親王法守

なか〳〵にまたけはさひしき朝けのそよとはかりの秋の初風

後九条前内大臣家哥合に

思唯入道前摂政家民部卿

さりともや衣手うすき秋の夜の月にいくたひ露けかるらん

新玉津嶋社三十首哥に

是心院入道前関白左大臣

二葉より秋をしらせし萩か枝の上葉そ今朝はうちそよきつゝ

源貞世

秋きぬと萩の葉風の音にしも知(せ)る露の〳〵家

題しらす　　権中納言範輔

野の色は一むらすゝき穂に出て見えくれは枯ゆきにけり

後鳥羽院御時秋歌合に　　後久我太政大臣

吹風はさそふ秋かはちらすとも青柳のかつらき山の姫はきそうり

久安百首歌に　　花園左大臣家小大進

風の音は新枝の萩の末にこそ秋のあはれも誰とはるらん

百首歌奉し時萩　　左大臣

こはきは咲萩をさそふ原は松風とさひしとのみやおもひあふらん

松をしけき　　入道一品親王永助

秋来ての風の庭にはおのれのみやそよくる庭の萩はら

嘉元百首歌に　　前大僧正良覚

露さへもかねてけふ吹く萩の上の風の枯葉みたれ

永和百首歌よみてたてまつりける時　　後普光園院前関白左大臣

夕霧に残るは枯風にきえてもさとの庭の萩かな

庭萩といふ事を　　後京極摂政前太政大臣

秋風も萩の葉すゑにすさふなり夕くれはたゝ涙そて霜のすゑにかゝる

萩を　　前大僧正道意

夕まくれの新萩の露を吹風のみ夜の霧そ袖ぬらしけり

後小松院より人々に千首歌めされける時

月影も秋にはしめと萩の葉に露やおきそふ風の音そする　儀同三司

貞和百首に　民部卿為明

萩原や風の床とは成にけり枕にちかき庭の萩はら

仙洞にたてまつりける百首の中に　源詮信

秋風の萩の葉わけて枕にの露をきて払ふ袖の中絶

秋歌の中に　法印浄弁

いつくよりみえ初る星をいかにせん中空になる萩のうへ風

待七夕といふ事を　洞院摂政左大臣

あまの原雲のけしきもよるかけてみえぬ舟をもまちせらん

後九条前内大臣家歌合に　土御門院小宰相

天川流てすみぬひこ星のつまむかへ舟ややこきさ

弘安元年百首歌たてまつりける時　式乾門院御匣

あまの河やそせもいとゝみなきりて雲かくしてそ星合の空

二品法親王守覚家五十首歌に　源師光

七夕のまちしの糸をひきかけてうつしとめまし星合の空

題しらす　俊成朝臣

むかしたれいかなる契かけそめて七夕の人逢初てあさからぬかな

建武元年七月七日内裏にて七首哥かうせさせ
給に　前大納言為定
七夕の幾あひなれし初尾花ほにいてゝや結ひそめけん
藤原雅郷朝臣
七夕のあまの羽衣露ちりてゆきあひの空に秋風そ吹
崇徳院御時百首哥の中に
皇太后宮大夫俊成
織女はこめつゝくれなんあらひに雲の衣かへさく
正治二年百首哥に
前大僧正慈鎮
七夕のんやこらひの暁のわかれも又たけさ星合の空

貞和三年七月七日花園院にて三首哥よまれし時
七夕雲を
後入道前内大臣
星合の秋もふけゆくあまの雲のうへに橋の契なるらし
七夕を
中納言兼輔
七夕はけふくれてはいさ河なみもさわきまく風もふかなん
天禄四年七月七日一品の宮にて一品宮の碁
んこのまけわさし給ける時乃あふきに
恒徳公
天の河あふつゝも松のきりこそ七夕のそれは帰るそ
かねてはあそひのきりかなけにとりて
中納言保光

年ことにいのりやかはす七夕のちきりもたえぬためしあるらし

延文百首哥奉りける時

等持院贈左大臣

七夕の渡せる舟やいかならむけふや別のなみたかゝらん

正治二年百首歌に

従二位家隆

何事をかはしあふらん天の河なかれもあへぬ袖のしら玉

七夕後朝といふ事を

源重之

たなはたとおもひやまたむ七夕の明ゆくあさの羽衣

おなし心を

平師氏

立かへりなにゝかへむ七夕のあかぬわかれの天の河波

八日のあした選子内親王のもとより、かちのはに露をとりて

いかにつけてと露をけるたくひの心をこひしかりなむとあはれなる

返しとて

法成寺入道前摂政太政大臣

あまの河のかはらの露はきえはてゝおもひやるかなうらやましく

題しらす

相模

以字の萩の下葉にをきそふる露ならぬ枕に山ふかき

萩の露をはらひもあへす行せなる

花山院御製

秋くれはかはらぬ物をとなかゝらも萩の上こそ露けかりけれ

延文三年百首哥めされける次に

後光厳院御製

ちらさくは梢にさける萩の花ちるをもまたぬ色やかはらむ
野辺の夕萩とはなる野を
従三位雅家
こゝろある野への真萩をたちよりて夕露なからむすふ手の庵
庭の萩露を
明魏法師
里はあれていまは神のみ住む秋の野となる萩の露
新玉津嶋社三十首歌小萩苑
従二位家平
夕暮を別て来ぬ枝にみにしかは秋の錦なりけり
枝の露を
権中納言雅縁
さ萩さく手植の糸をかけてすむ庭にそ白き錦なるらん

前参議経蔵家歌合に
刑部卿頼輔
秋の野は花の色々おりそへて萩の錦に立そかへりき
従三位頼政
おなしくは萩の花の野になひくを見てのみこそは行過つる
行路秋花といふ事を
修理大夫顕季
露けしな花の野の小萩原かりそめにも人の袖にうつりて
前中納言雅孝
嘉元百首歌に
咲ちらす野辺の露もたえまなく露もきえなむ秋萩
建長三年影供歌合に朝萩をよみて

すゑ野の秋の花はあけて霧のまよりさす野のあさ萩も　衣笠前内大臣

新玉津嶋社三十首歌に

頓阿法師

宮城野のあさ露分て旅衣[illegible]ておもふとちすり

前大納言實名

玉ぬくところかはらぬ野への萩か花にむすひたる玉やあるらん

祝部成光

さをしかのよるのかすやうすらん手枕はかりの野への夕露

左大臣家にて草花露といふ事を

権中納言雅世

まくらする野への手枕露のうへに咲て花の錦やみたるらん

建長三年影供歌合に朝草花を

前大納言為氏

朝ほらけをきつる露をみのひとは咲る秋の花の千草に

題しらす

按察使公住

秋の野の花の露をもちらさしとうつ手枕はかたぶねの白玉

柿本人丸

手にとれは袖さへ匂ふ女郎花このしら露にちらまくもおし

中納言家持

秋風は日にことに吹ぬ高円の野への秋萩ちらまくおしも

建保名所百首歌に

さそ浪に野辺のあさ霧ちりそめて立風さそふ夜にあけし空

従三位家衡

たいしらす

二条院三河内侍

秋の野乃花の色数そへてみはやかさならむ人のこゝろ

源信明朝臣

みる海の渚乃里の花すゝきまねきそへてすゝむさゝ白浪

秋乃哥中に

後京極摂政前太政大臣

うらなひく入江の尾花なみこえて夕浪よするふきの浦舟

前大納言為氏

霧はるゝ野原の夕日影みえてまねく尾花に秋のゆふかせ

源師光

露しけき花の上ふく風に玉ぬきさらす浅茅の夕暮

後九条前内大臣家哥合に

土御門院小宰相

真葛はふ松の籬の花薄まねく袖にしけき露かな

路薄といふ事を

源清元朝臣

玉ほこの道のゆくてにまねくなり尾花か袖は旅をそふく

貞和百首哥に

前中納言為忠

誰そとて袖をかりて秋の野の尾花か末に夕くれそまつ

秋夕を

侍従為敦

うき事をなくさみかねし夕そとゝはゝや人に秋のたくひを

住吉社に奉りける哥の中に

前大納言仲光

それとなくあはせて松の風にたえたえかよふ蝉のこゑなるらん

寛喜四年日吉社撰歌合

源家長朝臣

ふしかはる月も松風すゝしくてまつのしたかけひきもて蝉のこゑ

寳（寶）治百首歌に　正三位成實

いく秋の月かはるらん蝉のこゑたえぬ松にも年のへぬらん

題しらす　隆信朝臣

ありやなしやかけてなくなる蝉のこゑ松にすむらし秋のゆふ暮

康花院入道前太政大臣家の百首の歌に

前大納言為氏

山しけきおかのゝ蝉の松かけにいよゝ秋の夕暮

蝉歌の中に　無品親王

すゝしさとなかぬおとにそあはれとは汀の蝉や行かよふらむのあさきり

寛元百首歌に　中納言為藤

ひたすらにふくと松風秋はきぬ夕の空より枝とまりけり

題しらす　伴將

かへるさの衣にさしも松風の秋のけしきをまつしらせける

相思夕上松臺立蛩思蝉聲滿耳秋といふ事を

前中納言定家

蝉の声虫のうらみそまさりける松のしたてる秋の夕暮

秋夕露を

前参議雅有

此所にや康治ハさねこそなくむ花はまたあまの神のみ春
弘安元年百首歌めされけるついてに
亀山院御製
あさ風にふきくる虫のこゑよりもなたかきやめの袖
法性寺入道前関白家歌合に野風を
源雅光
かるかやの末葉の露にやとりける月やみさえて浪そ立
百首歌の中に小浅茅露
伏見院御製
虫やありし庭のあさちの露の上におきそふ浪そ見えける
文保百首歌よ
三条入道前太政大臣

さえなあきの夜の霧もあさちかすの浪と虫の啼ん
月前虫といふ事を
顕昭法師
小萩原露の上葉にうつりそふなく虫の聲たえぬ月影
左大臣家にて三首歌よませ侍けるに野虫を
源持信
秋ふかき小野の虫のかせに霧ふかみ月のまかきの虫の聲
聞えける
虫の音のみなく
法印義寳
七夕の秋のひややかなるに虫のこゑかれゆく浅茅かけに
後九条前内大臣家歌合に
前大納言俊平

きりくす夜寒の霜や枕のちかくに啼よはるらん

秋野といふ事を　権大納言義嗣

霜むすふ尾花か末の浅茅から枯く虫の声よりも秋風そ吹

弘安百首に　参議教経

秋かきりさ野の萬糸かせしにしみをよる枯虫の声

関駒迎を　源義将朝臣

あふ坂や清水にうつる影とみを雲路てひくこさりける駒

嘉元百首に　津守国冬

いふかたも秋はかなしき峯の尾上の月わかれゆく秋

山月といふ事を　前参議雅有

今夜のまくらにおきて見れは月をかく山の精風そ吹

新玉津嶋社二十首哥よませ侍し時

西園寺前内大臣女

よそにのみ見しを秋の夜すみにし山の嶋の夜半の月

文治六年女御入内屏風に人家池ある所

あそふ所　前中納言定家

下風みしも池井ても月の光をぬれと宿の池水

嘉元年中内裏にて人々百首哥よませられける時

林中月といふ事をよみ侍る

称光院入道前太政大臣

今宵かな月の光をみつるかな秋のさ夜ふけの月

建武元年八月十五夜内裏にて五首歌よませられ

言葉の月前秋風といふ事を

前中納言公脩

雲をこそ空にはらはめ月やとる露をはよその庭の秋風

新玉津嶋社三十首歌

沙弥成光

あきらけき光そことにたえぬみの神代かけたる山のはの月

貞治二年百首歌めされける時湖月といふ事を

よませ給ける

後光厳院御製

さゝ浪や志賀の浦風はらふとも晴わたりてはさゆる月の影かな

建仁元年八月十五夜撰歌合に湖上月明といふ事を

参議雅経

かゝみやまあきとなくしもいて月影にさゆる湊の秋のこゝろを

元亨元年九月亀山殿にて題をさくりて人々に十

首歌よませられけるに水辺月を

前大納言實教

はし川いさこもあかつきに衣手に月をそやとす宮はの松原

宝治百首歌合に

俊頼朝臣

なにはえやなかにさやけき月のあかしに浦月をそふるかん

崇徳院御時八月十五夜に松間月とせむといふ事を

よみける

源忠朝臣

秋の夜の月はのちにうき世とむかへつゝ家にかゝりけり

康安元年二月世裏にてひさくらの花にそうつりける

まつらの浦の月秋夜といふ事をよませ給ける

後光厳院御製

月はなほすまぬ秋の夜さへあけぬる夜やなかるらん

九条院中宮とかけるからの三条殿にかりまちかけしに

御方にいく人か月見るを待ける時

大納言成通

さしもなく月の夜の秋の月はみなかみのさえまさりけり

田家見月といふ事をよませ給ける

後鳥羽院御製

宿ちかき山田の庵のかりねにも猶さえさえて月をみるらん

松月を

法印浄弁

いく秋か家路わすれてその浦の松吹く嵐月をみるらん

月前眺望といふ事を

永福門院左京大夫

秋の月山のはいでてたゞ海のみなと浦にて影ぞさやけき

水辺月を

権中納言雅縁

ながむる世も水の秋の夜ともなく里と月やもるらん

月前旅中

前大僧正果守

川水のおりて世をまもる夜の色にみな世の山の端の月

山階入道前左大臣

かりの明月を海とも見えて鏡山前のかへるみゆる影

住吉社にてよみ侍ける中に海月を

源義種

こなた川浪にかけて住吉の松の古枝より月やさすらん

百首歌たてまつりしに浦月

左大臣

月影の霜よりしろき浦風に松吹きて住よしの浜

法印経賢

松下月を

わすれぬる松のあらしはなくてさし月の影のきえやとる家の波

應永十六年八月十五夜内裏にて人々に題をさくりて

歌よみ侍りけるに寄月渓といふ事

を

藤原為尚朝臣

和田の原松にちきりをかけてさし月の光はいつも秋の錦の

江月を

称名院入道内大臣

月影もこほりにこめぬ白露の玉江のあしに浦風ぞ吹

月多遠情といふ事を

源有宗朝臣

ながめやる猿山の峯まで遠くやみの紫の月影

貞和百首歌に

中園入道前太政大臣

いつまでか千里の外の秋の月は世に影もなくさよふけて夜

百首歌の中に海月

後小松院御製

秋の夜の月やもろこしの海とふれしまの浦風

建保三年内裏歌合に海月といふ事をよ

十五首歌に　順徳院御製

秋の夜ハひかりも雲にさそはれてたゞ嵐のみのこる月かな

海邊月を　今上御製

夜よなりあかれハなきもしは旅さへかはる塩屋のけふりの月哉

塩屋月といふ事を　前参議雅有

すまの浦のあまや月にながめてん程ぞよりくる海の声かな

百首歌奉りし時野月　権大僧都堯孝

浅よなりて秋のふ露を玉とぬくの声にむすぶ野の露消ん

月歌の中に　鎌倉右大臣

秋風に夜の雲の花はれぬればあまのかは原月ぞすみける

貞治百首歌に庭月　源縁平

たえて庭の蓮の露ハらてよこゝろなき秋やけ月の影

鷹司院帥

故郷とあれにし庭は浅茅生にいさゝかくまもあらずすむ月哉

世代のゆくゑち月をみて　僖子内親王

いつも月くだちてかへるしばしいとゞくまなき秋のそらかな

建保四年内裏歌合に　従三位行能

月影も秋定にならぬこよひ秋をいつにしもとすらん

建仁元年撰哥合に河月似氷といふ事を

皇太后宮大夫俊成

千鳥なく河風寒み月清て水も枯野の柳そありける

寂蓮法師

月清み水まてよる山川の世にまつ風さゆる氷のうへ哉

文保百首哥奉りし時

藤原行房朝臣

みくまの浦浪の上にてなかれしに夕霧の上にうつる月かな

建仁元年撰哥合に暁月霧深

如願法師

藤たつや霧も枯風吹にならぬさすありあけの月

百首哥奉りし時暁月

関白前太政大臣

関戸にあけぬとおもへる月影にかよふ宿の松風寺も吹らん

弘安八年住吉御幸の時暁月を

土御門入道前内大臣

あき来ぬと雲ある手とや三島江の若さにやとる暁の月

深山月といふ事をよませ給ける

後鳥羽院御製

住あらしたる山宿となりしよりかくらむ松に有明の月

新玉津嶋社奉納三十首哥に

藤原俊成朝臣
ありそめぬ浮世を秋の露さへにやとるそはかなき山の井の月

延文百首哥に
等持院贈左大臣
さゝ吹て槙の葉分に秋風の深山の月やさやけかるらん

建長三年影供哥合山家月を
土御門院小宰相
数ならていかてすむらん山の月やみちあふなからにかはる秋のさかりは

正応二年石清水若宮哥合に山月を
参議雅経
あくかれんかゝる月をもみよし野の雲の外なる山の端の空

義仁法親王の栂尾にすみ侍ける比内裏より近
さはの庭とりて数々十首題を降し給ふとき
たはふれにさゝめて松月を下さるゝ
後小松院御製
ちとせふるためしそ月の影よりもなほすむ松の緑の色

御返し
義仁法親王
雲井よりすむ月はひかりそへてや松緑そひて影もそふらん

題しらす
宝篋院贈左大臣
山さとの柴のあみ戸はさしもせてうつる板まにもる有明の月

新續古今和歌集巻第五

秋歌下

最勝四天王院障子に高砂かきたる所に

前中納言定家

高砂の松につれなき風さへや尾上の鹿の声のこすらん

前大納言経房家にて歌合し侍りける時鹿をよめる

源通経朝臣

吹風もあはれむ秋の夕くれにそふるなくなる鹿の声かな

建保百首歌奉りける時

式乾門院御匣

妻こふるひとりや秋のよもやふかき月に鹿のなくらん

寶治二年春日社歌合に関路鹿といふ事を

前大納言為氏

吹をろす関のあらしの山風に鹿の声をもおくる逢坂の山

よみ人しらす

住吉の里をは花すゝきなひくかたの小萩原さ鹿の声

水無瀬殿詩歌合に山路秋行といふ事を

参議雅経

さらぬたにあはれはたえぬ鹿の音のさそふ時しも秋の岑

建長三年影供歌合に暮山鹿

前右兵衛督教定

夕くれは山のをちになく鹿の声たてゝや妻をこふらん

元亨元年九月亀山殿にて七首歌講せられけるに
おなし心を　　前大納言実教
あらし山あらしの嶺をたてゝよそに見し葉もとまらて鹿そ鳴なる
弘長元年百首歌奉りける時
後九條前内大臣
しら露をおきしく尾上のさ萩原つまとふ鹿やたちさまよふらん
題しらす
兵部卿成家
さをしかの秋のねさめをさそふらんや秋風の萩に鹿の鳴らん
新玉津嶋社三十首歌に　鹿
権大僧都良春
あすしらぬかりねのとこの秋風に鹿の声のみおとろかすらん

嘉暦二年内裏歌合に
大納言経信
さ夜の静けさやけき宇治のひとりやねらんと鳥の音
秋の歌中に
前大納言隆直
高砂のをのへの月に松原の松風ちかき鹿そなくなる
田家といふ事を
養徳院贈左大臣
山かつのかり田のもとの松風さむし夜そふけぬる
弘安百首歌に
静仁法親王
以嵐の松にもたえてあらしの嶺におもひはらそしくれ
山田のいほをもる竹の
花山院御製

山田もる人とはなしにおとろきて時そともなき秋はきにけり

題しらず　　　柿本人丸

立つゝきいなはの露をかりそめて折くるあしの秋の風

　　　　　多々良持世朝臣

家たかき柿もいまやからすらん山かけの風の秋風の声

延文百首歌奉ける時秋田を

　　　　等持院贈左大臣

夕日さす峰の山もと露晴て門田の稲葉露そみえける

秋の御歌の中に　　後二条院御製

山かけにたはたの末の稲葉のかせふきつゝりて秋風そふく

貞治百首歌に　　山階入道前左大臣

風寒きかりかねなくや山田のかはつなきけりて山田庵

延文百首歌奉りける時

　　　　民部卿為明

秋寒み穂に出しきぬる月も見く山田の森の衣手のうへ

千五百番歌合に　　大蔵卿有家

みかりくるいなむしろにもあきはきぬ月のさなへのころ

新玉津嶋社三十首歌に

　　　　藤原為邦朝臣

年ことにかくるいなきの秋かせの山田のもりやなかめくらさん

貞和百首歌奉りける時

　　　　進子内親王

霧はれぬ朝日のかけに山のはの雲にあまたのかりのなく声

建長三年九月影供哥合に霧間雁

前右兵衛督教定

あさ霧の八重にかさなる山風にたえ/\聞てかりそなくなる

洞院摂政家百首に 前参議雅有

みなと風夕しほさやき松浜の入江の波にわたるかりかね

文保百首哥中 三条入道前太政大臣

きり雨を松のあらしそやまぬかな神山のはの松の浪

後照念院関白太政大臣

風寒き秋の夜かせのふきしきてかさねやる衣かな

百首哥奉りし時 前大僧正慈鎮

雲井ふく嶺の嵐を松に吹て山の秋やさそふ秋の夜

宝治百首哥中 従二位行家

秋にさへ旅人の袖ぬれぬらんたひねかさなる袖の露

田上にて山家の事を 源頼之朝臣

ねさめや立田の面に松風の袂にもさむき秋の霜つさ

嘉元百首哥中 従三位為子

枕にも露けき秋の嵐吹いなはそ松にもつらき秋の枕哉

題しらす 前大僧正道慶

とふ人も稀なる三輪の山田守庵吹く夕嵐に松の村立

延文百首哥中に擣衣

後普光園院左大臣

あかつきに声をかさねて里ことの寝覚の床や衣うつなり

進子内親王

衣うつ音もさえさえはさむけしと暁かけて霜やおくらん

おなしこゝろを

前関白左大臣

なれし袖の古郷の月を見しよりも寝覚の床にうつ声かな

新玉津嶋社三十首哥中

前中納言定宗

さ夜深く砧の音ぞよはるなり誰か夢路の衣うつらん

藤原後京極良経

いねかての衣うつなり秋風や里をかりねの夢さそふらん

二千首哥の中に

誰か里の擣衣何方とも聞わかすちかき寝覚にうつこゑの行へ

後小松院御製

ふく風の衣をうつとはなきにこの里ことにうつ声そきこゆる

永和百首哥に擣衣

権中納言為重

こゑたえぬ綾の衣の末そよきなれつゝかはる夜の衣うつらん

おなしこゝろを

頓宗法師

さ夜ふけて衣うつなる声すみて月の霜にうつ夜半かな

百首哥中に

源持之朝臣

ゆふさりの衣うつなる里とほみ夜もすからに打やまぬかな

左大臣家にて三首哥よませ侍りしに里擣衣

権中納言雅世

浦風にゆりもせかへす秋風や寒き芦屋の里に衣うつ也

正治百首哥に　従二位家隆

里はなをあそひてもまたにあまたたひの松風源氏衣うつらむ

擣寒衣といふ事を　源持元

いく夜さてとはゝ人めは旅やとのあさちか露に衣うつらん

百首哥奉し時　前大僧正義運

吹送るふ秋の夜寒に袖の露もひとつにおきて衣打

題しらす　前大納言為家

かり人の口こそ夜寒に納まらて木幡のさとは衣うつ也

千五百番歌合に　後京極摂政前太政大臣

かり人の尾花をそ枕にて山科の木幡のさとにかりねして

百首哥の中に　順徳院御製

山風はたゝ夕くれて秋やかさねんやへの霞の中の尾そよ

貞和百首哥に　前大納言公泰

そこはかとうつりし袖のぬれそてまくそうつ秋のあさ霧

延文百首哥に　後普光園入道前関白太政大臣

明ぬるか枕の雁は小夜ふけて鶉なくなる秋にさそはれ

前大納言為定

篠の葉にさえ行霜は有明の山おろしもや寒さまさるらし

宝治百首哥に　太宰権帥為経

旅人の打越山は霧こめてもとこし道もえこそまよはれ

新玉津嶋社にて哥合に寄風朝霞といふことを
　　　　　　　権中納言雅縁
とをはるかなみちのすゑもかすみけり霞のしたにゆくさきのやまおろし
　秋哥の中に　　　法印慶運
あしからやさかのゆふ日もかくろへて霧のうへにひとりそみゆる富士の白雪
堀河院の御時百首哥奉りけるに
　　　　　　　修理大夫顕季
さゝ浪の音はかりしてみえぬかな霞たなひく玉川のさと
　建仁元年三月盡哥合に湖上曉霞といふ事を
よませ給ひける
　　　　　　　後鳥羽院御製
志賀の浦やふかくも沖は霞みて枕にきこゆるかりの音

海邊霧といふ事を
難波かたこや(?)への浦の苫すみなく夕霧にかすむ枕のあけかた風
　建保名所百首哥に
　　　　　　　前中納言定家
三日月のおもかけ沖の友舟もとも(?)にたゝよふ枕なりけり
　百首哥奉りし時
　　　　　　　権大納言實量
枕にのこる(?)浪(?)のかよふ風(?)そ(?)山(?)のあらしと聞(?)の子(?)ゆき(?)の(?)浦(?)
　貞和百首哥に
　　　　　　　中宮大夫公宗母
明ぬるかいかにも(?)羽音さえて(?)あか月(?)の川(?)の(?)面(?)の霧のうへ(?)
　小鷹狩せさせ給ひける
　　　　　　　順徳院御製

ちる露も此やの清菊のうへもなを霜もうつろふ秋の精人
世中に猶摘といふ事を
式部卿邦省親王
ちる露の清かりてもまた志萩ぞたゞよそにかはるらん
建保三年六月廿合に行路秋
如願法師
旅衣なれしとは志も太つ姫のおもかけに松のひまもかと
應安六年九月十三夜三首歌講せられし時菊籬
月といふ事をよませ給ける
後光厳院御製
うつろふとみるかゝりて白菊の籬や月の冬はなるらん

いつそみる月をあやなしとかりそふ菊の嵐にふかれ
権大納言為遠
久安百首歌に
藤原清輔朝臣
浪風のさよひのこゝはみなとふれをのかゝる菊の花
延喜十三年菊合に
坂上是則
浪とのこゝそみなせ川岸のわたりの白菊の花
菊をよみ侍りける
凡河内躬恒
あかなくに秋のかたみの菊のにほひは猶こそまされ
家にて人々題をさくりて不老寿多残菊
白といふ事を
鹿苑院入道前太政大臣

花とみし錦色こそおきそへて霜にかはれる菊の上にも

弘長百首歌に　　後嵯峨院大納言典侍

をく霜にうつろはんとや朝な〳〵見かへりゆく白菊の花

百首御歌の中に菊を

土御門院御製

きえかへりうつろはんとやうつ霜のたえ〳〵にける白菊の花

建保三年六月歌合に行路秋

後久我太政大臣

草枕ゆふ衣ぬきたにもの十すゑの露を見かへりゆく

秋歌の中に

紀貫之

なへてよそみかへる秋は常盤なる山の秋をもしられける

旅の秋を　　後京極摂政前太政大臣

いくよわかれてかさなりし丸寝の風にいくたひもねぬ秋

水無瀬殿詩歌合に山路秋行といふことを

皇太后宮大夫俊成女

今さへ流れをゆく龍田山すゑの秋の名をとふ秋

文保百首歌に　　藤原行房朝臣

みるや恋する秋の夕くれは小萩くる袖にいろそふらん

後光厳院に紅葉十首歌めされける時初見紅葉

権大納言為遠

松のはもかはりそとはかはりけりしくれや染めぬ色の秋の葉

紅葉といふ事を　　入道一品親王永助

梢にはむらの一葉に鐘こそひゝきけれ紅葉の色はうつろひにけり

最勝四天王院障子なり　安達原

前中納言定家

時わかしあらしの思ひもよらぬ深き色そ秋そしられける

貞和百首歌に

正二位隆教

深山の紅葉の色も一入明日ふるまさる時雨の川浪

紅葉十首歌めされける次に紅葉交松といふことを

よませ給ひける

後光厳院御製

深山の紅葉のあかぬ松さへ緑をもかへてそ木々の紅葉

二品法親王覚誉家五十首歌に

法印経賢

山姫や深山のこすゑん紅葉の錦は松の織のしら糸

正治百首歌に

参議雅経

そめつくしけんや時雨も音羽山あらし吹そふ峯の梢を

前参議経盛家に歌合侍りける時紅葉

刑部卿頼輔

冬ちかき庭にはあらぬ紅葉にはいかてさてこそあかくみえけれ

後光厳院に紅葉十首歌めされし時又秋紅葉と

いふ事をよみ侍る

後福光園摂政前太政大臣

あらしにはまた染かてや松ましる木々とも見えぬ山の紅葉

同時隣家紅葉

後八条入道前内大臣

霜のまやあけぬとみえんまでに よその梢に山本のもみち葉

紅葉ふ苗人　兵部卿長經

立よれは見ゆる木陰のもみちには色こきまつも松もなし

月照紅葉　從位為家

露かゝる月の木間もかはらしな山のは遠く紅葉して（よは）の

百ゝ夜もあかぬ錦紅葉

前大僧正義道

立よりする生田の杜はそのかみもあきにや紅葉ちるらん

雅永朝臣

二たひ露も時雨て染尽風にさそはれ本杉の梢のもみち葉

建長三年影供歌合に行路紅葉といふ事を

皇太后宮大夫俊成女

時雨ゆく梢の山は紅葉ゝの色ふかみや哀なるらん

住なれし山里の紅葉を讀し平忠房朝臣の家に

うつし植侍る松の枝につけてかの梢を

かゝるや時雨しかの年ふりて見し宿の紅葉と

色かはる色も見よ

後宇多院宰相典侍

み時雨もをしまれ紅葉ゝの色ふかみやかく成ぬらん

應安三年内裏にて題をさくりて人々の歌

奉りける時紅葉源

権大納言為遠

雲かゝるみねは時雨の山本やふかき色ゝいとゝ染るらん

貞和百首歌に　前中納言雅孝

深山の千すきをあらし初瀬山入あひの鐘に雲そしくるゝ

百首歌中に　後京極摂政前太政大臣

みよしのは花そ雪ともふりにしをひとりまたれぬ紅葉ゝ

弘長元年百首歌奉りける時

前大納言為氏

打錦深染けてはかりさなから山の梢しくる林のもみち葉

紅葉を　二品法親王尊胤

さほ川の雲の衣はいかならし紅葉まさしそそのみ錦とやみん

延文百首歌に　権中納言為重

音羽山ふもとの時雨ふりしきや紅葉に深き色をそふらん

百首歌奉りし時紅葉

二品法親王道助

時わかぬ色そみえける河岸の松にかゝれる葛のもみちは

中務卿具平親王

霧たちて梢もみえぬ紅葉は風のたよりにしらせてやみん

前大僧正道玄

時雨つゝ紅葉まかせる神なひの三室の山は秋の錦を

うちむれの風にたちも錦をさらしてそ紅葉をかさす

まつりの庭に三室山にて

今上御製

錦やと見るや月のみ時雨けむ山嵐さそふ風のした紅葉

月歌の中に　崇光院御製

なか月や月さえとほき野の新すゝき枯葉に色のそと

後京極摂政前太政大臣家歌合に暮秋

大蔵卿有家

長月の月も有明に成ぬれは秋はいくかもあらし世(の)中

寂蓮法師

くれて行秋の名残も山のはに月もとまらぬ有明の空

貞和百首歌に

前中納言為秀

冬ちかき今は日数の少なきに暮行秋の月もすむの空

久安百首歌奉りける時

皇太后宮大夫俊成

さゆるよの霜と消えて行秋をつきぬ物にも今そあはれ

宝治百首歌に

太宰権帥為経

なか月は名のみ有明の末の夜のあはれ日数も今そ秋の

暮秋の心を

按察使資明

くれゆくをおしむともなき秋の日はいとゝ身にしむ物にそ有ける

文保百首歌に

中納言為藤

秋もまた今日をかきりとくれて行秋の名残のころも神の心

百首歌奉りし時

前摂政左大臣

神な月あすはしくれのふるさとにあはれをそへて秋やゆくらん

左衛門督実雅

うつろはん秋の名残もしくれふる山のかせにや秋もゆくらん

延文百首歌に九月盡乃心を　前大納言實名

かきりあれは秋もなかはの月の影をかけてそ惜しむ秋そいぬめり

新續古今和歌集巻第六

冬哥

冬のはしめの哥　源道済

冬きぬと松のこゑより山里のいとゝさひしく成まさるらむ

初冬嵐といふことを　権中納言雅縁

はけしさも時ゝふりにし来ちる紅葉のあとも冬やきぬらん

千五百番歌合哥　源家長朝臣

時雨ふきて秋といひし山嵐の松のこゑより冬はきにけり

嘉元百首歌奉りける時初冬　法印定為

冬きぬとしも霜結むさし野の浅茅生の枯葉の風の音さへさひしさ

初冬時雨を　栄仁親王

枯なまや梢のいろやいかならむ時雨音きこゆる冬はさひしき

百首哥めされしついてに時雨をよませ給ひし

今上御製

むら時雨ふりかゝるとみえて山の端にかゝれりさためなく百首よみける

正治二年新宮哥合に山時雨といふ事をよませ給ひし

後鳥羽院御製

立田山梢のもみち枯なれて里の風さそふ村時雨かな

貞和二年百首哥奉りし時

中園入道前太政大臣

いつのまにかはり行らん人の心向の梢の紅葉は冬もかゝらし

新玉津嶋社三十首哥に時雨

宗久法師

ちりてける松の嵐に時雨てもまた山ふかく時雨ふるかな

百首哥奉りし時

前大僧正満済

吹風の浅茅か末の朝時雨かつもみちはの色そ染ける

建保三年六月哥合に暁時雨

如願法師

うきこゆる槙のひさしにあかつきの夜半の時雨を

永禄二年七月哥合に

土御門院小宰相

神な月木葉ちれる比叡の山はさなから錦の数はつくさし

正治二年百首歌奉りける時

寂蓮法師

霜ふらは庭をはらはん山さとゝ志る人まてもはらふ人なし

冬の歌中に

二品法親王守覚

ころもてに嵐やさそふ紅葉ちれはいとゝ志くれの時雨なりけり

源通信

正木ちる嵐の末のはやき雲や峯をもわけてなほ志くるらん

嘉元百首歌奉りし時落葉を

従三位為信

枝にのこす木葉もいまは深山にもあらしつれなき[illegible]

後九条前内大臣家の百首歌合に

藤原光俊朝臣

ときはなる松をよそにもみる人の木葉ちる比

新玉津嶋社三十首歌に

前中納言実遠

山姫の深くやかくす深山にも嵐のかせにちる紅葉かな

法印顕證

さそひける嵐の紅葉みちて霜よりさきにちる紅葉

冬の歌中に

権中納言宗清

うらかれし庭の落葉に霜をきてさこそは[illegible]

延文二年百首歌奉りける時

入道一品親王尊道

嵐のさそひきたにける紅葉や神にこそけふ手向なん

後小松院かくて題をさくりて五十首歌つかうまつり

けるに杜落葉を

権中納言雅縁

生田川水の林へとまりて木葉をさそふ杜の下風

大井河逍遥に水上落葉といふ事を

修理大夫頼季

大井川紅葉の色をうかへても山の紅葉ちるらし

住吉社に奉りける歌の中に

正三位義重

みなせ河底よりおちる紅葉をつりて浪をみやそめけん

河上落葉といふ事を

良心法師

みなと川かみに吹らん木枯に山もとくてあけの紅葉

詠百首歌に

従二位家隆

こぬ秋を駒とめて河山河を木葉のみこそ流れゆくらめ

冬歌の中に

権中納言雅世

木葉のみちりしく流れ山川にとまりて淵とみるかひら

延文百首歌奉ける時

前大納言為定

神の上の霧をはちる浪やとまりて月を残す霰とみなの

貞和百首歌題あされて浪なり

光厳院御製

嵐もる枝ともなく風の音も静まる霜にさゆる枯野の月かけ

応永十六年内裏三首歌合に寒月

後光院贈内大臣　家胡前切 廣太

冬の夜は秋霜の浅茅生の霜にさえまさる有明の月

権大僧都堯尋

寒空霜とみるあかつきはにてや月は清のさやけき

右衛門督為盛

よなふゆの空に流れてさゆる霜夜の月のひかりかな

前参議持俊

晴風のわかれ笹葉ふく秋は空くもなき霜夜の月

冬の夜嵐中に野寒月ともみえし霜結ぶ原

さひしさは冬をあはれとかけそむ枯野の霜にやとる月

亀山院御製

水邊寒月といふ事を

雅成親王

ふるさとの鶴川山にさやけき月のかけにさえつる

弘安元年百首歌に寒月

式乾門院御匣

いけ水の氷のおもはかさねてや池の面にさゆる霜の月影

下部兼教朝臣

題しらす

冬枯の野原にすさむ庭の面にそれとはかりそ残る初霜

延喜十七年閏十月菊の宴せさせ給ける時三条右大臣
おほんかはらけたまはるとてうたつかうまつるへきよしおほせ
ことゝもをせよと君かおほせたまひし御返しに侍けるに
延喜御製
およひなく菊の花こそあはれなれ折ある花やあるらん
前栽の霜枯るをみて
式子内親王
霜おける籬の花も籬にそ枯みゆくとあはれなりけれ
百首歌に
二条院讃岐
をりゝけは秋の名残をとゝめなん霜のまかきに匂ふ白菊
後小松院位におはしましける時花をさへりて三十首
歌たてまつりけるに旅宿寒草を
前大納言為世
たつかへりとも籬の霜の下荻やさをせし風の跡のなこり
千五百番歌合に
前中納言定家
花すゝき草のたもとも朽はてぬなれてわかれし秋をこふとて
百首歌たてまつりし時寒草
前大納言公種
風さむみ夜〻へて霜を置ぬらん庭の枯葉の色そさひしき
おなし心を
兼好法師
冬枯の野への草葉の霜のうへにかはらぬ風のさむさ
後京極摂政前太政大臣家の歌合に枯野を

前大僧正慈鎮

秋の色みな川ふに野辺へときえて空ぞ秋なる月の梢をさそふ

後九条前内大臣家百首哥に

衣笠前内大臣

浅茅原霜の下葉に枯そめてみゆる野原の野辺へのかれ

題しらす

平常邦

うらがれて末葉をかけて露霜のやどりもあへぬ霜結ぶ也

文保百首歌に

中納言為藤

難波江やかりふく小屋と葦や重き入江の葦に霜やおくらん

正治百首哥奉りしに冬歌

源具親朝臣

霜さゆる枕に嵐音たてゝ野辺の霜にも何ならむ

後京極摂政前太政大臣

吉野河瀬の音さへ浪こえて岩間におつる谷の松風

建保名所百首哥

僧正行意

ありなくゝと氷やむすびけん清瀧川の瀬にさえていて

後九条前内大臣家百首哥合に

藤原俊長朝臣

さゆる夜の水のひまをたゝせつゝやゝさ山川の音絶也

若氷といふ事を

養徳院贈左大臣

池ていにみちきとせくと音もせで岩ゐの水のとぢつゝ比らか

湖千鳥を　　後二条院御製

さゝ浪や比良の山風さゆる日は行かふくらし舟もなし

百首歌中に千鳥を　　後京極摂政前太政大臣

あかつきまてすけかへて枕のうへに聞えつる河原千鳥なく也

嘉元百首歌に　　前大納言経継

河風に浪の月のかけさえて霜夜の千鳥空に鳴なり

千鳥を　　権大納言通親

夜川にもなく袖もぬれさ衣千鳥友なくさむたに友まとふらん

題しらす　　源時繁

風さゆる二見の浦やみて友よふ河音すみて千鳥なく也

磯千鳥を　　正三位知家

風さえて夜半の浪の音さえてこほるあかつきになく千鳥かな

建仁元年二月五十首歌に　　参議雅経

立かへる月にむかひて秋の夜の千鳥声たかくなる松の浦風

千五百番歌合に

浪のうへに友よふ千鳥うら傳ひ月にむかひてかへるあまの舟

百首御歌の中に湊千鳥といふ事をよませ給ける　　伏見院御製

波さわくなきさの湊の浦風に入江の千鳥むれさわく声

いかの湊にて千鳥のなくをきく

浮ねせし神代のことは情なさにきゝしや千鳥なくなる

大江嘉言

後宇多院に十首歌奉りけるに浦千鳥を

よみ人しらす

しほかせに海士の衣やぬるゝ夜はなくねさへや袖ぬらすらん

題しらす

多々良持世朝臣

行てたにかたらきかん神の浦ちとりいかにふせとて鳴あかすらん

大僧正道順

あまきれてさゆる浦になく千鳥みなたいらかに影さえて空の

永和百首歌奉りける時

後八条入道前内大臣

和歌の浦浪路はるかに友千鳥たちかへりける数もなきかな

堀河院御時の百首歌に

前中納言匡房

月影のあかしの浦に清見かたいつ千鳥なくあけぬこの夜を

題しらす

藤原雅顕

あかつきの嵐の寒き床にしてなくなく千鳥友よふなれ

百首歌中に

前大僧正義運

霜さゆる鴨もさむしやなかゝみて声かなしき月にさえゆく

水鳥を

藤原雅親

むれて行羽音も寒き夜半に鴨のさわく入江にさえ渡るらん

貞和百首歌に

前中納言為忠

水るみのきえぬかきさ草の花さへかくもさむき秋かな

百首歌よみ侍りける時　権中納言宗経

池水のいひさまにもよらぬ藤浪のさきけむかたの春そのこれる

霞をよみ侍りける　権大納言實國

我すゝのあしの原の藤のはなさやけき露にかかる白雲

百首歌よませ侍りける時　紀の国の

関白前太政大臣

葉のはなにそむ露の白玉かずそふるあはれおほきは秋のよ

左大将右臣

風さむみ玉とくさけの澤水にあさの光ぞちるかなしき

承元百首歌に　法印定為

あさまたき峯の霞にたなびきて風吹つゝあけゆく井手の篠原

千五百番歌合に　前大納言兼宗

秋たけぬ今夜もまた長月の秋の名残をすつるはの志ら菊

家の百首歌合に雲を　後京極摂政前太政大臣

風さそふ峯のしら雲たちかへりふるさとの山の雪けなりけり

初雪を　権中納言雅世

白妙の霞にかゝるはつ雪のひとりのこれるはなのいろかな

法印宣性

ゆきのこる峯のかけ道雲やとりそのまゝみゆるはな吹の雪

百首歌よみ侍りし時浅雪

かつらきやおさらいまたまつ嶺の松ひとゝきみつよ初雪

題しらす　恵慶法師

ゆふされは山ほのむとも見えぬまてたえまの雪ふりにけり

二品法親王守覚家の五十首哥に　法印経賢

山たかき雪ぬ光のみちにそらゆくありあけの月

雪の哥の中に　前参議雅有

ちるは花つもれは月のひかりにて松よりけさは庭のしら雪

正応二年百首哥に　文内々

さひしさとひとつゝむへのみやまかせそのいさゝのゆきのあけかた

家にて三首哥よみ侍りしに冬常盤木雪を

冬きれはさえつゝかれる常盤木にふりてそつもるまつの白雪　左大臣

後宇多院に十首哥たてまつりし時松上雪　按察使公敏

ゆくへなきおもひそふるかきえかてにまつにかゝれる雪のしつえを

左大臣のすゝめ侍りし新玉津嶋社三十首哥に雪　藤原為之朝臣

かきくらしさえゆくそらのみねの山のおなしかたにそみゆるつもる雪

題しらす　兵部卿成家

志賀の山ことしの雪は山ほのおとのかけにふる雪そ

雪哥中に　藤原雅孝

ゆふ暮に我ゆくさきはしらねとも友なき山に雪は降りつゝ

名所雪を　菩提法師

吹おろす嵐の音もたかしまやみをの杣山雪降にけり

参議雅経

[illegible]人をもまたぬ三輪の山杉乃木すゑは雪乃しらゆふ

百首御哥の中に雪を　土御門院御製

吉野山けさふる雪やけりぬらん人の通ひのあとたえにけり

冬哥の中に　曾祢好忠

椎柴もとりふゆくさ神山のみちも雪ふかくなりにけるかな

雪深山といふ事を　前大納言親雅

[illegible]やま志け山路とてのこかけても消ぬ雪かな

嘉元百首哥に　従三位為子

雪ふかきみゆき[illegible]ちりうく花のまかひ[illegible]

式部卿邦省親王家少将

[illegible]の梢をみねまて[illegible]雪つもりにけり

山雪といふ事を　[illegible]右大臣

又[illegible]風[illegible]のみ山は雪ふかくなりゆく

新玉津嶋社三十首哥に雪　前大僧正良瑜

[illegible]人は[illegible]吉野山雪[illegible]

嘉元元年七月哥合小松間雪

従二位行家

とふ人も跡絶まてそさひしけれは生田の杜の雪の夕くれ

後宇多院に十首哥奉りける野径雪を

弾正尹志房親王

白妙の野原の雪にふりはへてとはるゝ人の袖まつらし

松かけやを

前大納言實教

旅人の野わけのみちやたえぬらんしをりもみえす野への志る雪

雪満野中

順徳院御製

なかめやる雲ちたえたる人のあとかは野中の松の雪の深さを

元亨三年亀山殿千首哥に

式部卿邦省親王

大井河こほらぬ程もいは清やらて雪にかけたるせきの志そ見る

應永十四年内裏二百首哥合に浦雪

後三条入道前太政大臣女

白浪の寄くる浦のまつかけて雪をそ見れと浪そのうらなせ

小槻匡治

さゝ浪や鏡の山の袖まて雪かとそ見る志賀の浦風

うちよする浪の花にも似てる雪のうきてそみゆる浦の松かせ

任若ちりそまかひゆく浦の中に

祝部成

大納言重光

紀の海やなきさの浪のそれとなく雪よりまさる浦の松かせ

海邊松雪といふ事を

藤原雅永朝臣

雪ふかきいはれ松原うつもれて塩干のうらの都そさむけき

延文百首歌に雪を

入道一品親王尊道

降雪のきえはありとも山路をはあとたえ人めもなきやいまそうつまん

後深心院前関白左大臣

冬かれてとひこしかたはいとゝなをかつ消ぬる雪に杉むれ

正治二年石清水若宮歌合に

藻壁門院但馬

さらぬたに人めかれゆく山さとに猶さひしかる庭のしら雪

貞和百首歌奉りける時

前左兵衛督直義

なかゝにとふ人めには跡たえて雪ふかき宿のさひしけれ

貞和百首歌に

中納言為藤

うらやまし雪をもめてゝいとまなくふりにし人の跡をとめける

官庫ふく文節の秋はてゝ河ふかゝらん

後深草院弁内侍

数ならぬ身にふる雪の百敷やふるきみちの跡はありけり

冬歌の中に

前中納言宗重

霜はらへおもひかさぬる河とこのかさみの袖に雪ちる

伏見院に三十首歌奉りける時

永福門院

呉竹のうき世ハ神もしるものを庭火のかけにかなてうつらん

後小松院かくれさせ給て次の年の春つゝしまれける時

ちる時思ひ出る花を

権中納言雅縁

此道の思ひ出てもちれやちれ花のさかりをすくさはまち侍へ

後九条前内大臣家百首哥合に

按察使顕朝

いにしへの世にためしなくやかへさまし花の錦をたちもかさねて白露

永和二年百首哥めされける次に鷹狩を

後円融院御製

みかりする野辺の鶉のとりともいかにさかへん世をもわかやすみけん

松か枝に心をよする世の行末

崇光院御製

此程は心のまゝにゆかし世をあはれともなくて花の雲かな

権中納言為重

延文百首哥読て

雪ふれはさかの野山のきへはてゝ花にたえてしころのなかめは

建保名所百首哥奉ける時

前参議忠定

あしたのみちそ今もむかしの世をなれはかのみならつる花の木のした

文保百首哥読て

孫王事忠房親王

箸鷹の狩場の原ののこる草をかれにしをは雲にかくれて羽維そらに

後宇多院に十首哥奉りける時

前大納言経継

炭かまの烟ハ雪に立そひて空にしらるゝ大原乃さと
民部卿為明
空さゆる雪気の雲をすミかまの烟にそへて大はらの山
百首御歌乃中に炭竈をよませ給ける
土御門院御製
しる人そさひしとは志れ大原や烟をたのむすミかまの里
弘安百首歌中に
藤原俊定朝臣
炭竈の烟をさそふ風ふかくてしほきをのゝ山もと
正治百首歌に
後京極摂政前太政大臣
かきくらす雪のやまさとにたちのほる烟の末そひとつ成ける
百首御歌の中に歳暮乃心をよませ給ける
伏見院御製
いたつらに春の心をまちぬかなおとろへまさる身とハしれ
後宇多院に十首歌奉りける時歳暮といふ事を
二品法親王覚助
世の人のいそくはまれになかむれはうしとおもひや年のくれなん
永和百首歌に歳暮
深守法親王
名やともみえぬ川の年はくれにけりまつのとまるの瀬々のかよひち
おなし心を
儀子内親王
としくれとおもひしとしのまへの松きねの浪にそ暮そ過けり
前大納言實家

くれ竹の年ハ我身につもるともかさしの梅ハ月日あらたむ

法印守遍

かひなしやたとへ七十にみちぬれのあつむる雪ハおのか延

法印慶運

限ある老の命の一とせハ身につもるとよろこひやなけれし

貞和百首哥に　　中園入道前太政大臣

かそへつゝ年たかき身のあまりあれハ身に仰きいやをたのまひ

あとむとするん

新續古今和歌集巻第七

賀哥

嘉元々年正月和哥所にて春松契齢といふ事を

うゑまきし浜松かえにちよの行末

後鳥羽院御製

ゆくすゑも神のうけれ松か風しつく世の春をも庭にかそへし

文治六年女御入内御屛風に花ある木ともつきそひて人の家にある所

右中納言定家

里わかぬ春のひかりを宿しとて君をまつにそさかりなる鶯

後一條院御時七十賀の屛風に

参議輔親

あたらしき春にかさねてめにひく松のつもりかすをはかそへん

題しらす　源順

いはひへのたねをひけは八千年まて命をのへの小松なりけり

後法性寺入道前関白太政大臣家百首歌に祝の心を

後徳大寺左大臣

住吉の松をもむかしに二葉より名をきこえたるためしをそひく

明徳三年三月内裏にて松契万春といふ題をは

しめてかゝせ給けるついてにあそはせ給ける

後小松院御製

緑そふ大内山の松乃葉にこや万代の春乃かすらむ

権中納言雅縁

春ことにあふそふ松はちとせはことはとちるらむ八千代の春

寛治元年十二月鳥羽殿にて松陰浮水といふ事を

かゝせ給ける　京極前関白太政大臣

千とせへて花随松のいさこくのとけき水にうけそあまる

永享九年十月左大臣家に行幸有て松延齢

といふ事をかゝせられ侍よませ給ける

今上御製

陰ふかきのけの松のはむかしに八千代をこめし御世のさかへ見

和哥所にて松契多春といふ事をよみ侍しに

権中納言雅世

いく春も松にかけてと歳の玉松かさしのそれそてく松か葉なん

後己心院関白前左大臣家にて庭松春久といふ
事を
瑞雲院贈左大臣
庭乃面に木高き松のみとりいろいかに春の色をそめなん
元徳二年中殿にて花契万春といふ事を講せ
られし時　前大納言為定
九重や大内山をよそにみて花の春はつきしとそおもふ
建保四年閏六月内裏歌合に
兵衛内侍
花の色はつきしとそおもふ百敷や大宮人の千世のかさしに
貞治六年中殿にて花多春友といふ事を講せられ
させられける時
後光厳院御製
咲匂ふ雲井乃花の本枝に幾世の春をかさねてやちらん
桜の宴に席書つけて
後福光園摂政前太政大臣
治る世にまたひさしき春をこそ千世もかさねよ花や契らん
藤原為邦朝臣
八重へん君をおもふの花の枝は風をもさそふ九重乃ちり
藤原懐国
我宿の千代のかさしとみるかにはなにそにほふ色をそへぬれ
建久元年三月五位の時よめる
宜秋門院丹後

咲そむるけふしもさかりの藤なみは千世をまつにそかゝりそめける

題しらす　平兼盛

紫の雲とやひく藤のむら千世の松にもかけてくらん哉

康暦二年三月内裏にて人々藤花久薫といふ
事をよませられける時よみ侍り

通陽門院

神かれといひてそなかめん咲藤の松にかゝれる千世の色を

天授四年藤人々歌合に

よみ人しらす

君か代は山のはいつる月影のひさしき末をすめる空かな

建保六年中殿にて池月久明といふ事を講せられ
けるに

光明峯寺入道前摂政左大臣

秋の池の月もかはらていく千代の光をそへて影とはしらん

従二位家隆

万代も月の光を契りさや庭まてとゝのすめる池水

正安元年九月十三夜仙洞にて池月久明といふ
事を

是心院入道前関白左大臣

いく秋の光そへてこそ万代と月にちきらせすめるいけ水

前中納言基隆

月影のくもらぬ庭の池水にいまもへき千世もかはらん

前中納言為忠

草も木もなひく御代とは池水の玉藻もみかく月は宿らん

祝の心を

君か代のかすに数をかそへてや雲井の月のちよもすむらん

僧正実縁

永享六年殿上根合に

権中納言経家

あまてらす月日はさやかにすむ万代をとめる雲の上かな

後小松院かくれさせ給て千首歌よまれけるに

祝言を

前大僧正満済

あひにあふ君か月日とおなしくはかきりなき世を猶契らん

東三条院家十首の屏風に人の家に雪降る所

源道済

松の色は雪も白きもかはりきて千代経るくまのかはらさりけり

弘安八年三月西園寺にて従一位貞子九十賀せられし時

竹林院入道前左大臣

いのちのみ猶まもれなからへはまつこの世ちあふ年の数

智足院入道前関白太政大臣家歌合侍りける時

なかれての世さへたのしからしとこそ

康資王母

君にいる年を万代ゆつりそへてなをはかりなき

太宰大弐国章か子むまれて七日の夜

ひとつの破子の松にかけたる千代

清原元輔

住吉の浦の岩ねの松も君かため千とせをかさねまつりそへん

正治二年百首奉りける時

式子内親王

君か代はちよにさゝれの石の岩ほとかはらてまたれ

題しらす

大蔵卿有家

わか君は千世の坂をもこえぬへし子日の松の末そしるへき

後小松院位につかせ給ひける時庭松契久といふ事をかうせられけるに序奉く

成恩寺関白前左大臣

松の葉に露やたまりて玉きその庭には千代の数をそへなん

福照院関白左大臣

たくへ見ん松のよはひも久しきは雲井の庭にいくよ経ぬらん

後今出川前左大臣

いく千代と限もいはし君かへんよはひをちきれ庭の松かえ（代そ）（かし）

権大納言為尹

たくひなきみかきの松にかそへてそ千年もしらん君かよの末

題しらす

大納言経信

大井河ひきてきたるはかけて河を亀の尾山の松そしるらん

人の子の内せさる七歳よりよろ

清原元輔

千とせふる松と亀とにまさるせつて八百万代へいはゝまつらん

永承六年殿上根合

中納言資経

春日山さしそむる松乃葉ハ君か千とせの数にそありける

前大僧正慈鎮

君か代にかすへくらへん住吉の松は幾世そ千とせとをしれ

堀河院御時百首哥たてまつりけるに祝の心を

中納言国信

松陰に又はりきる住吉の千とせのまつハ君そみるへき

日吉社にたてまつりける百首乃中に鳥を

按察使公保

滝のさき相乃柏もとしくれハ緑そへぬる代々のことさ

元亨三年七月亀山殿にて五十首…

百首哥たてまつりける時寄鶴祝を

惟宗光吉朝臣

和歌のうらや山乃流にかさねてそ千世のたかきは鶴もしるらん

應永廿六年三月仙洞にて鶴等祝といふ事を

後光厳院御製

かけそへてたちまさるらん

いく万代のみきりにちらぬ千代の数を鶴もしるらん

権大納言實秀

末とほき代をかそへんや我君にちきりの松乃千代を住乃ん

権大納言實秋

かくしつる祝乃にしきやその山まつ乃ことの

百首哥乃中に

後小松院御製

むかし田上川のかはらぬをむてふる道とふきおき

千五百番歌合に　惟明親王

宇治川のせゞにいはねさゞ浪に松たちもちぎる千代の数かな

醍醐入道前太政大臣

すが川のながれたえせぬ瀧つ瀬に松も千代さく君が代ぞなれ

正治二年百首歌奉りける時

宜秋門院丹後

神風やいすゞ川の底をみてかれせぬさゞれ君が千代かな

建保二年石清水若宮歌合に

参議雅経

君が代はながれてとほく石清水末の世のみやさかえゆかん

寄日祝といふ事を

源持賢

朝日さす影も千代をみかさ山みねの松がみどりのいろは

貞和二年百首歌奉りける時

前中納言雅孝

天の下をさまれる世と嬉しみの君がめぐみや空にみゆらん

同年十一月風雅集竟宴に松に寄する時といふ事を

まつりごと

後山階前内大臣

いにしへの道のあとをひろめてみちある代を世々にまもらん

前大納言公泰

松さかれる和歌の浦風ふくのどかに立代々の玉いく世の数かな

延文元年六月内裏にて三首歌講せられける
に寄道祝言といふ事を

民部卿為明

和歌の浦にあつめてみかく玉かしはこれそあまの代々に光そへなん

麻苑院入道前太政大臣家にて三首歌よみ侍りけるに
おなしこゝろを

冷泉入道前左大臣

みち人の心をみかけ玉かしこの道ある時そくもりなき世に

文保百首歌に

前中納言実任

かしこしなあまつ日つきのひかりそふ言の葉にのこる代々のみちかは

和歌百首奉りける時

権大納言為遠

まことある道はたえせぬしき島のたよりにかはる君か代々哉

百首歌奉りしに元行

左大臣

君やはかりねたゝふる竹の園代々生ひけり

題しらす

権大納言長家

池水にいく代すむらむかけの鳥見し世まてすまひなるらん

左大臣家にて池水久澄といふ事を

源満政

萬代にいはふためしかはれて君か代すめる庭の池水

寛治元年大嘗会悠紀方屏風に高野村

前中納言匡房

我君の千代の松かえ月毎のたねむすふ野の玉ぬ

仁治三年大嘗会悠紀方屏風哥

前参議為長

春風は枝もならさて静かなるちとせをこめし青柳の村

永仁六年大嘗会悠紀方屏風花垣里

権大納言俊光

白妙のゆふかけて神まつる卯月になれは花咲の里

暦応元年大嘗会主基方稲春哥

正二位隆教

万代のためしにそ汲田上や林のしたにたえぬ流を

永和元年大嘗会主基方屏風備中国松山

松山

権大納言忠光

十かへりの花咲ぬへし松山の木すゑをそへて見ん

浦よりみゆる雲

新續古今和歌集巻第八

釋教哥

一乗の法をとなへし人のみぞ三世の佛乃師とは成ける哉

三井寺にて一條院乃御時上総介時重といふもの國より

のぼりて千部法花經をよませ侍りける結縁に参りて

日吉十禪師の告とて語侍るとなん

梅の木に鶯さそふ梅に身をなして花さけくと鳴そよの風さ

花はまづさき世乃法水に百日まふでてなくなく祈

まうでゝ彼の夢に觀音のいまだ世に侍るといへるとなん

一色一香無非中道乃心を

前大僧正祐性

梅花色もにほひも法とはにのみなこそ見る

文永二年白河殿にて七百首歌よませ

させ給ひける法華經乃

花山院前内大臣

世にいでし佛の悲願をもとめずば法の華さへ散ぞしらまし

法花經序品我見燈明佛

前大僧正慈鎮

灯のひかりをそへてあきらけき法の花をぞ深くさとらん

様中納言雅縁

法の心を

なほし佛法の花にほふ世にたえずなれば人の心をも

元百首歌の中に

万秋門院

くもらしれぬかゝる法の花ならてさもせけくもの心を契を

見解の心をよみ侍りける

仏国禅師

をりえてもしはしすさむ山桜花そふかきものとこそすれ

寄[illegible]徳本衆人恭敬の心を

重阿法師

いさみえぬふる程の桜まてたにたつもしらねとみえてとふ

題しらす

前僧正慈澄

世の中にたれかはのこる代を経てかくれなき身を

瞻西上人法華経たてまつり侍ける時人にすゝめ侍けるに

たまくとるひとへにまことを法の手すさひ

神祇伯顕仲

夏衣法のなかにとぬきつれはいろはすみそめとそなりにける

方便品

藤原秀茂

うすくこき法の花の色々もひとつみのりのことそしられける

舎利会に花をたてまつり給ひける時七宝の蓮を

後京極摂政前太政大臣

此世より蓮の糸にむすひおきし契りかはらぬ身とそなりぬる（せイ）

立信上人のもとより法文のことかきつかはして侍けるに

深草の露のかことをしるへにてはちすの契りかけし待ちけむ

返しに

土御門入道前内大臣

きえぬへき命をたのむかたもかなはちすの上と契りおきつれ

建保七年三月水無瀬にて撰哥合

後鳥羽院御製

秋の色へつあさくもとひし白露やうつりに玉のさえん

中納言為家因忌て続拾遺続後撰集にのせ不無書

経徳行為を　惟宗光吉朝臣

小石川も影みえけりすみぬる水も月のかけなりけれ

題しらす　法印慶運

影まて深くのかをとふ比は清き月に影をかはさん

正治百首哥よりてまいりける　文円

松ふかりあかのやまよ見るあらしはれにたがよそあかり明の月

壽量品のこゝろを　従三位為理

法のあめけさ心のうちに浄土も心をしらぬあかつきの月

因正心欲見佛　藤原高範

入月をおもふ心の海をかへしてひきてかへしなれはみさきし

さそふきの古道寺にいくとや待る

僧正果縁

まよひ出る雲の暁をまちてかなしきむかし月やまちもせん

釈教哥の中に　清輔朝臣

月その朔日はかゝる法のまつやうかへて心もあきらかに

捨染のこゝろを　寂然法師

なかきよの深の玉やこらぬせの人数の末のこゝろをもらぬなり

白河殿七百首に維摩會といふ事をよみ侍りける

後嵯峨院御製

神な月時雨るゝ[illegible]けふとてやなかりの庭[illegible]

元亨三年七月亀山殿にて人々歌をすゝめて七首

哥よみ侍りけるに不説四衆過罪戒の心を

権僧正道我

あまの原[illegible]くもりすむ[illegible]風[illegible]

不輕菩薩至遠見四衆亦復故往礼拜讃歎 必當作佛

前権僧正玄円

たか[illegible]の[illegible]にいそてさくへき花とみゆらん

正治百首哥奉りける時行非道通達佛道の心を

参議雅経

みな人の[illegible]雲ゐに[illegible]

序品照于東方の心を

前大僧正慈鎮

黄金色さやかに見ゆる法の日[illegible]

[illegible]勧学會にて[illegible]

深山

藤原仲實朝臣

[illegible]山すみて[illegible]

如是縁の心を

藤原盛徳

むかし[illegible]

嘉元百首歌に

中納言為藤

いかにしてさとりのはちすにのほらまし ひかりはいまそかゝる山の端

瑞雲院殿左大臣遠忌に法花経の料紙のために

其の所宗資門院すゝめさせ給ける譬喩品の

心を　　入道一品親王永助

こゝろくに三乃車にわかれてもひとつみちにやめくりあふらん

浄土の法文なときゝしめし給ける後諸縁の外に往生

院とかいふ寺にありし人の中へ遣はさせ給ける

後小松院御製

見ぬ人のひとつむまれやとはそら浄土のさかひ物よあるなれ

三心具足の念仏を　　後光厳院御製

ことなれは三とさけとも一すちに南無と唱へてなかりけり

三世の諸仏を観するに其一段の義はなしいはゆる

之此浄生をねかひもとめ慶政上人のもとへ申つかはす

花とて　　二品法親王道深

えたもいとたのもし年月のこすゑかくれし花となる世

錫杖乃弁とて人々よみ侍るに

小弁

あまき衆の義をいそきて落さまし声は錫杖かけらさらませ

上覚上人のもとよりみちをとはれ書をおくらせ

給ける義をみゆるかへりはたとかきとゝめてよむ筆は

高弁上人

なき跡の義をしめそとは声やきゝてきゝ人に

前中納言定嗣経文字をとめ給ひけるに金光明経
懺悔品をよみてはへりける

僧正實瑜

夢ならてまた夢なりせは浮世乃やみはおとろかるへき

涌出品令諸大衆謂如半日の心をよめる

法印経賢

そのかミを経しやいかなる鷲の山ちとせもしはし法のむしろは

弘長百首歌奉りける時

後九条前内大臣

和乃海みちひく塩にまかせつゝ我とはさとれ法のをしへを

寂蓮百首許に忍辱波羅蜜乃心を

賀茂季保

はちきをしられ後をもおもふ心のみちは法にをはれ

世乃かさりすてゝ御法にいりける尊師のさりも
かゝるへき時たに浅くかきてかくをせける

権僧正永縁

忍辱のこゝろはいとゝ深やまの籬むすはぬあらぬ新むしろ

題しらす

よみ人しらす

ちかひきし心しはかり苦にかはるへき地獄の絵にあそ(?)...

地獄の絵に書てはかなき鬼をさへおそれぬへく

おえさるかきくれはるをみんとく

二条院宣旨

法のりも羅をこそりかくしてかくれしにゆきてその山に

嘉元百首歌に　前中納言為相

鹿のゐる井にひ神となのむうれしきまことの山の雲

浄土三部経かきて舞楽を供養し侍りしに権律師

云昊かきつる十時で浄土讃侍りしの日に法

つもりて　頓阿法師

山のはの入日をかへすてたのむにしるしかならず法のみち

侍し　権中納言具行

山の端の入日をいかにかゝるよといかて鬼にうつるあふ

元亨三年七月亀山殿にて人〻題をさくりて千

首歌つかうまつりけるに懺悔

権僧正道我

ひろ沢の池のかすみはいかにてせをし神をとる

傳法灌頂の後渋乱のひまにたいしてえみの

よみ侍ける　権僧正道助

加持のこゝろをたよりに法のうへのにほひにしてかはらぬ

廉範殿入道前太政大臣国撫を巡礼し給ひける時

よみつかはしける　前大僧正道意

法の舟をのりおくれゆくへをさためんとてみのちの

前大納言為世遠忌にてもすゝめて法華経供養

よみ侍りける　前大納言為定

いにしへをしのふる袖もつゆふかくしひにいたりぬるかな

松の風の字を　権律師玄覚

ゆふひさしてのやとは成ぬるこゝろかな松の木の間に月をみるかな

妙音不及衆難處皆得救済　皇太后宮大夫俊成

わしの山さしもの山のみなかれとおもふ法にそまりける

難思念利會たくひなき法をふかくあふきての法文の心をよみ侍りける　前大僧正道慶

むかしきく鷲のたかねの雲のうへにけふは法の花をみるかな

二乗を　明魏法師

かくれなき法の舟にさそはれて世の春をたのまさらめや

縁覚の心を　よみ人不知

ひとりのみ花をさとりてさきにちる[illegible]

餓鬼界　前大僧正道玄

涼やと川せの浪にたちよれはなほもほのほのみえこそわかれ

題しらす　前大僧正果守

さとりえぬ心のやみにまよひつゝ蓮葉のまゝにあまたこひわかれ

中納言為藤周忌に縁経の前にもとめける小葉

権大納言公明

ひとりの心を

たちかへりしけれはなれさる人のほとけのはなの[illegible]

権中納言信輔卿後宇多院宸筆御経供養

たのむとも君かふるき世の御のりの花のやまはなれは

題しらす　中宮小　よみ人しらす

とゝまらぬ色とはさとりの都まてかよふ心のみちそしるき

高野にすみ侍りける比の夜よみて鐘をきゝて
念誦のとておもひつゝけゝる

元可法師

きゝのさき世の夢にてやきゝつらん暁をまつのあらしに

義満門院に後朱六時讃の御かへしへきさ
まつりへきさとし給ひけるおたて定めりいつはりなか
のりの天の声をきゝて

皇太后宮大夫俊成

かのくにの雲ゐはるかのみちなれと心は法にはなれさりけり
身雖遠離心不遠離といふ事を

寂然法師

出たりとおもひて出しかともいまそうき世をそむきはてぬる
後法性寺入道前関白太政大臣家百首哥に寄
経の書写乃心を

正三位季経

かきなかす法乃水くきまれなれとあふをすくもぬるゝ袖かな

題しらす

勝定院贈太政大臣

くりかへし法のひもつけてなかけるを何と浪よりひをとる川の
なかれまて

新續古今和歌集巻第九

離別

ことたちのあはれはかねて行末をかくとも志らせく
ゆくりくるしられは涙くつけれ

藤原顕輔朝臣

東路や末は日数もはるかにて旅の空あはれそかなしき

弁定くたり侍ける時

九條右大臣

あふ事のかきりにはあらしと思へとも我さへあはれものなれ
二条太皇太后宮式部といひける人か津の国にまかりて
ある程をへてつきてあはれなるにひとつあはれと

いはぬかりかへらんたへつけてくちき散りの命くやまそふ
ともまりられゝ心ゆへもそひつくりけり

あはれ行末の萬の末をつてまてはるやまかるへき家の前に

左京大夫邦輔

別乃心を

前大納言隆房

はる旅行くやかてこの清華京まておもふそあはれなりける

権中納言基継太宰権帥にてくたり侍ける

そりゆ行りてはれつかへそもなかりける

源俊頼朝臣

いまこそはこのたひのわかれせはいかゝそもはれくまさし

大納言経信大宰帥になりて侍ける時

申つかはしける　周防内侍

都にてしくいきれ松原のあはれはいつかわすれむとさし

あひまつらむとのみおもひおもはるゝのちさへゆきあふべきと侍

月あかき夜人々まうできて旅へまかるへしと申けるに

寛叡法師

わかるともおなじ月の光をはちるれども君すむかたにかよへとおもふ

古寺の月をさへ見なからむ時ならぬかはらぬものゝ事

を

旅衣都の月をそでに見ばかならずあはれかへり見ん人ならまし

別の歌の中に

権中納言雅縁

わかれてはいつあはむと思ふにもかなしきはいまわかれとなるよ

はるかのところへまかりける人に餞し侍るとて

前大納言資賢

行人をしたふ山路にひく駒の心をくれてとまりつゝさ

堀河院御時百首歌

祐子内親王家紀伊

まつ程はほどとこそおもふに恋しきはあかぬ別のなごりなりけり

春日社にまうでゝ百首歌の中に別を

皇太后宮大夫俊成

おなじくは都の春の桜花たちかへりては白雲のかゝるとを

きのふまで思ひ行人とその比のとまりのみこそつらけれ

一首

寂身法師

海山と書たる扇りつてきんにはりてそかはさく書て侍く

返し　　よみ人しらず

海山の浪はいくへかさなるともなのむかしのみちはかよはむ

文永二年七月白河殿にて人々題をさくりて七百首

哥つかうまつりけるに餞別歌枕といふ事を

藤原資有

旅衣きりかと書てすに日向の月を数へていさらふ

袖やまつぬれむ逢坂國へすきりなるかやつゝなる

従三位行能

なをつゝましかれさも白河の関のこなたにたちそへし孫

成尋法師のもろこしへわたるとて人々よむ舟

都いでかたきを見るに文をよせてしらむ日よりあすはく

京にとまりていてりけれは

成尋法師母

もろこしかはらの浪をこえてゆく舟はのとかに淺やかよふらん

あひみんと思ふ心はまつけれと我やなからむかたみなん

河内にありて日本へ渡るへくおもひて侍る時

春をまちてよみ侍けるうちに詠る

山口重如

ものをはたのみし物を我をまつやはするらむ

尾張国へ京よりくたりける男のたのみけるか

ひとりありけるをまかる時うちすてゝまかりける

つきもちきぬらしいとひをかり

傀儡あこ

あはれなる海にこし難波の命とどまふのひとよとぞおもふ

修理大夫顕季のもとにまかりて侍りける時あこに

まかりてさくりの海のそて二路をわかるる旅なるに

かすみにわかるるをみて

津守国基

浦ちかくまさりけるをみつつさそはれてわかるる袖に露かかる

十月ばかり女のもとへつかはしける

橘則長

あま事をなげかぬ人の所に月をりてひくをおもひやれ

崇徳院位におはしましける時百首歌たてまつりける

前参議教長

おもひやる暁方の月ならでこころぞはかりいかがすべき

故さりての常陸にくだりて侍りけるにつかはす

ほととぎす常に語ひつけ侍りける

俊頼朝臣

おもひかねおとにぞなきてさかりなる常のこころのうきや

父宰相の許に

なにごとをおもひもしらぬ身なれども我はさきの世にあやかる

かかるさの国よりくだり侍りける時人のおとづれざりける

返事に

藤原長能

まつほとをまつとしもなし文机の末の下露は笠にぞ折ける

堀河院御時百首歌

神祇伯顕仲

かりそめにみる夏衣なほも又おもひそめぬる秋の夜なれは

東三条院四条

あすしらぬわかみをなのむそのかみもやまれたつしとおもふ扇かな

藤原助信朝臣備中守にて下りけるに業平朝臣の扇おくらせけるを見て

冷泉院御製

我よあふぬへの秋むかしのなさけとはいかにそのころさえそ

藤原助信朝臣

小野宰

手ひとりたのむ扇のかせはいかにしてはなれぬ人を手向なかれこそ

西院皇后宮上東門院とおなしく扇あはせ給ひけるに

かはらぬをちらぬ桜をあまつかせふきもよはせぬ扇なりせは

ことたかく給はらぬ扇をかたみにそ山のはのよにたのむへき

らんとかさせ給ひけり御返しに

上東門院

此歌元養比本

いとへとも浮世のなかにあはれとをみるとはさらになれぬなむ

式部命婦

ありはてよそへる時扇とそつゆとそ

四条太皇太后宮下野

山のはにいるをおしむとまつほとに月をあはれとみさりしはなし

保持小侍従かとは世の都花をかさりてなり

京へかへりのほり侍りしころ

懽子内親王

としひさしく花の都へかへりなは恋しかるへき

ことなるしれ

新續古今和歌集巻第十

羇旅哥

宝治二年百首哥たてまつりしとき

前大納言為氏

旅人の暁いそく関の戸ハ鳥の音よりやあけはしむらん

新玉津嶋社三十首哥に

式部卿邦省親王

相坂のゆふつけ鳥ハ旅人の別をおしとやなくらん

題しらす

紀識家

秋ならてゆく雲路の名残にやいそくにつけて遠の

百首歌たてまつりし時

前右衛門督為識

里乃名もたえてしくれのかれ残りにいそく梢かな

後鳥羽院下野

寳治元年九月十三夜仙洞にて十首哥合に

いくとせか一夜宿かる松か枝をなかめしわれの床となるらん

頓阿法師

新玉津嶋社三十首哥に

かへりみれはみやこを遠み花の桜の宮郡の山も雲かゝれり

春の出る桃ふく月を見る哉

和泉式部

春秋の月に心をつくすとも宿そ忘れき

恵慶法師

題しらす

春をおしむ桜の梢もさそふらん峯の嵐のさゆるあはれ

峯のしら雲待ちける時若葉さく岩根に吉野のあるかな

前大僧正道昭

霧かゝる山乃峯やしほのうへ若葉のたれ若の松かれ

桜宿のはなよりもまさ付ける

後小松院御製

かすみくるもみちの絵の枝かはれ松の影も霞たな桜よ

百首歌奉りし時

無品親王

やよひ月霞にこもる桜花きえのこる雪の間を見かへ

わかれにし雨のそて月を見しく恋しきけれ

登蓮法師

なくさめはかへつなかなかにおもひそふ月影

羇中送日といふ事を

古郷の月影みせよいくよきつゝ枕の日かすそ空にしらるゝ

題しらす　源時清

おほえくは山の端にてたにかさねたなひくにほる河霧の秋

冬旅思といふ事を

よみ人しらす

旅ねやの浦風さやにさゆる夜は秋のかたみの山の雲みき

終夜たちてそまたみちゆく

隆基法師

いそしくかけてそ旅に月枕の寒さそよる河あらし

弘安元年百首哥に

花山院前内大臣

旅衣いくひもあらぬ秋の雨にしほれまさる萩原の道

旅哥の中に

能月法師

すか山むすや清水ひき宿としていく夜かさねぬ旅のそて

平氏数

かへりみる雲ゐにはなれぬる身まて月日をかさぬ旅のそら

因照法師

しらまほしいくかさなりの山のはの雲ゐはるけきをあすはこゆへき

題しらす

素暹法師

たちよるとなくてしらぬ旅ねさへ今はわすれぬ末の山路を

建保二年八月廿歌合に秋松

大納言通具

杉村に秋をかくしかねてや松の声は山露ふかくして

正治二年百首歌

後京極摂政前太政大臣

昨日まで雲ゐにあらそふ外山の嵐にあらぬ秋の衣かつく

賀茂社よりおほせ歌中に

権中納言家経

わたの原ふきたつ雲を旅衣日数をそへて松やおとさえん

権亭乃中に

源頼豊

うき事をかたらひかはす[illegible]にまつ[illegible]山の原

月前中なとよみ侍ける

権中納言雅縁

月にこそ又さきたちてかたみとも袖にとゞめぬ草の枕を

家に百首歌よませ侍けるに旅を

後法性寺入道前関白太政大臣

旅ねするおもはぬ人の夢を松にふきさそふ秋のかぜかなしや

題しらす

源光正

かり枕すゝ思ふの葉の露のうきをつゆとたゝぬ秋かは

賀茂能久

[illegible]ときをつけたる秋の一夜の旅の庵となりなり

閑旅を

平光俊

あふ人もまた白川の関あれて秋風のみそ吹つて来し

二品法親王覚誉家五十首哥に

後八条入道前内大臣

清見かた関乃戸さして浦の浪のみさえゆく旅人

百首哥奉し時

権大納言実量

旅衣ひもゆふ暮にさそはれてあかく秋そ来のよし山

貞和二年百首哥奉りし時に

前中納言雅孝

暮ぬとて日数ふねをたつ山のこゝちもやるとくもゆきし

入道一品親王尊円

なれのみ山のこなたは雲こそ宿あふ人もなし

乾元二年伏見院に三十首哥めされけるに次ゝ羈中

煙とも峰をよそに見行かな

後伏見院御製

立のほる煙のすゑを結ひこそ宿とふ山の麓をそきく

園光院入道前関白太政大臣

太山路や夕ゐる雲に分られは里みえて近く烟たつなり

文保百首哥に

弾正尹忠房親王

相坂山夕ゐる雲に分れきて玉せきとめしきて末の旅人

羈旅の心を

称名院入道内大臣

あしかれてひとりや旅の里とめむ山風寒く吹さしむる

左大臣冨をかり行人さそてあつさにいそかれ侍しとき

いさゝくもりてうしに宇津山をもちて　参議雅
経
宇治川むかしは夢の川のせとも見えすなりにけり
むすひて昔をとひし宇治の里にてそまふ涙の下かけ
家にて歌合し侍りける時篤を
権中納言雅世
宇治川や岸の夢路かけて夢の枕に秋風そふく
後京極摂政前太政大臣
題しらす
法印宋観
秋や思ふ宇治にて風の桂衣目をさまさせの川のやましろ
宝治百首歌奉りける時
正三位経朝

足引の山の峯の露そたかきそかくしこひのみちとて
元久二年六月和歌所詩歌合に山路秋行
如願法師
かけはしやこえし山の嶺の雲たえたえに見ゆる柴の庵
元亨元年八月十五夜内裏歌合に寄月橋
前大納言実教
宇治の橋にかゝれる雲は晴にけり月そこにゆく霧のかけはし
正治百首歌奉りける
参議雅経
なきわたるこゑも山中に鳴やみて月そ宇治川秋の中空
守覚法親王家五十首歌に

さりの上月にことなる花の床に萩ふきこすかせのやとれる
　　　　　　　　　　　　従二位家隆
弘安百首歌奉りける時
　　　　　　　　　前大納言為氏
あつき日の篠屋の床の枕にも露をけは秋そしらるゝ
文保百首歌奉りけるに
　　　　　　　　　法印定為
関山のよはもやかりねきさむらん秋の月夜は露そ松風
左大臣よませ侍りし新玉津嶋社三十首歌に
　　　　　　　　　権大僧都尭孝
羇旅
草枕たひねのかすの又ひとよ都をあすの都こひしき

題しらず
　　　　　　　　　従二位雅宗
旅衣草の枕にいくよともなれぬる床にこそ夢の露や
　　　　　　　　　前大僧正[illegible]守
いかにねて旅の夢をもみるへきにあさかりしく露の玉枕
　　　　　　　　　瑞禅法師
ふるさとの跡なき草の枕より夢路の後に袖そ露けき
　　　　　　　　　源家清
旅枕よその梢の草枕よりまたさそふ夢ちへの松風
　　　　　　　　　よみ人しらず
むさし野はゆくともしらぬその日をしはすやむすはん草の枕を
延文二年百首歌奉りける時

前大納言為定

武蔵野をゆけども秋の限なき草にやどかる旅の夕暮(?)

羇中送日といふ事を

成恩寺関白前左大臣

かさねきて(?)なほゆくすゑもはるかなる(?)旅の日数を(?)

弘安百首哥奉りし時

後嵯峨院大納言典侍

都をば雲井とはるかにへだてきてあまた山路を越えぞ来にける(?)

旅哥の中に

後法性寺(?)入道前太政大臣

越えやらで(?)あすも見るべき山のはに(?)残れる跡の白雲

法印義寶

明ぬとて立出る跡の(?)露ふかき(?)...の中山

正治二年百首哥奉りし時

前中納言定家

草枕夕露はらふ篠の葉のみ山もそよに幾夜しをれぬ(?)

貞治二年春日社哥合に旅暁月

津守国平

草枕むすぶもなき夢路にも月と友にぞいでたちぬる(?)

元亨三年亀山殿にて題をさぐりて百首哥

詠ませ(?)給けるに羇中鐘といふ事をよませ

給ける

後宇多院御製

立かへる(?)...山をあとになしゆく雲のそこなる入あひの鐘(?)

羇旅哥の中に　　前中納言匡雄

あくかれてねや里ちかく成にけり山のはのすゑは入あひのかね

海路多経十首哥よみける時　　中納言為義

あえなみの岩根を床に宿とらてなか成山のかけ清見かたをいとゝ行へもしら波のかすそ取てあらはにいてゆく空

三河乃八橋といふ所にてよみ侍ける　　堀河院中宮上総

八橋をゆくへことしらぬわれなれやくもてに濡をかけておもひわたらん
あはれさらのかりまつふかはかへりしよみかへる夢
てゆくかの小河かうへのあさ霜のいまたきえぬは暁のつとく

あつめや數々橋小なりてそいかなるわかりにこまつらんやそ　　湛覚法師

東路に君をいそくこまれなれは我を都おもかけなるらむ　　傀儡侍従

升開の山をこゆとて　　道命法師

なれし世の源（を）わすれてさ升関の山をこゆとはいつか

鹿苑院入道前太政大臣家百首哥に羇旅をいふ事を　　権大僧都覚為

草枕おもひ旅ねにみる夢の人はいかなる夢むすふらん

羇中述懐　　権中納言石時

都にもしはしの擣衣、庭やうき世の露の下部

二品法親王覚誉家五十首歌に

法印経賢

夜をさむく出しはなけの月にたれかふきしあれ

擣衣の中に

慶運法師

さい衣すてふるおもひも露けくて袖にみたるゝ月の影哉

題しらす

前中納言定家

弱なれも岩木の山のさとにても弱くへとこゑのうらそ稀

正三位季経

あはれなる宿の東の擣衣ねなくよひて袖にしくれの時雨

前僧正實俊

里とほきさゝのへ影をかあまりにうつ月の明かたの空

羇中暁晴といふ事を

永陽門院左京大夫

おのかへの野寺の鐘にまかせてもまたひとりぬる旅の枕

弘安元年百首歌に

土御門入道前内大臣

松竹なく明ぬるやまたかゝるも聞てやひとゝまつ擣人

題しらす

よみ人しらす

あひたゝ鴻よのさむ衣いく度かあかつきの松風の故郷

月前擣衣を

中務卿宗尊親王

衣うつ音まよはすけ月かけに寒く露あるゝ夜半のかなしき

家にて百首哥よみ侍けるに

養浄院贈左大臣

かり寝するみちの篠原きさらきをやゝ志て夜や更ぬらん月かたふきぬ

旅宿中小　　　　法印経賢

月とねむ宿もとふへき新手枕は草乃まくら露にぬれけるかな

旅宿秋月といふ事を

大納言経信

きし山路すなる小屋にてみる時そ枕色かりまた秋の月影

海路を　　　　二品法親王覚誉

こきいてやと浪にまかする磯ちの松まてとまるゆかの志ら浪

嘉元百首哥奉りける時おなしこゝろを

夜は浦よりうらにこきつれて浪の八重ゆく塩風

法印定為

弘長元年百首歌奉りけるに

前大納言為家

幾夜雲路の浪はかれともなほ旅人の枕なりけれ

住吉社にまうてゝよみ侍ける

祝部成仲

すみよしときゝてはいかてまつ人の浪の立ゐをみるらん

文保百首歌奉りける時

中宮大夫公宗母

たちかへる鈴乃浜松をみる枕のけい乾なきの行

後法性寺入道前関白家百首歌に旅のこゝろを

源仲綱

苫屋にもしかなれぬれは衣ほすあまのかりそめもひとしかりけり

旅泊重夜といふ心を

正三位義重

此あらす礒のみなれうき枕幾夜を浪にあかしきぬらむ
ともし人しらす

うき寝して此あら浦の海風にひまもなけれはさらぬ浪

守覚法親王家五十首歌に

大蔵卿有家

浪の上にをもきらぬ礒のかち枕何して夢はみえぬ夜もなき

海邊旅宿といふ事を

隆信朝臣

手枕のひまよりさえし海風にかせよ都を恋ひしき

旅の歌とて